

小説

昭和三十五年秋、二人の十七歳

ゆとり 満

1

思いがけない幸運に恵まれてチケットを手にしたY少年は「しめた」と思いながら日比谷公会堂の演説会場に入った。この日十月十二日、ここで自民党、社会党、民社党による三党首立ち合い演説会が開催されていた。主催者は東京都選挙管理委員会であり、それにNHKと公明選挙連盟が共催という立場で加わっていた。会場整備と警備の人的配置は、NHKから十四人、都選管から二十七人が当たり、丸の内署からは主催者の要請に従って私服の警官三十人が

出ることになった。後に私服警官の若干名及びNHKからの警備員六人増員が図られた。

Y少年が会場入り口の扉を開いた瞬間、場内の罵声、怒号、野次がまるで津波のように彼を襲ってきた。さらに二階からはビラがまかれ、一階の会場席にヒラヒラと舞い落ちていた。演説をしている舞台にさえビラが散乱していた。演説会場というより争乱の場という表現が適切なほどであった。

Y少年は、学帽を国防色ジャンパーの右ポケットにねじこむとゆつくりと会場内を見渡した。一、二分ぐらいして

から前の通路を早くもなく遅くもなく普通の歩みで舞台近くまで進んだ。舞台上の浅沼委員長の演説の様子や客席から向かって右側の椅子に着席する池田首相、左側の司会者席あたりの人数さえ確認していた。動揺することもなく、かといって緊張することもない普段と変わらない様子であった。さらに前に進み通路にしゃがみこんだところ、すぐ後ろから来た男性に「ここにいたら邪魔だ」と注意をされた。少年はその注意に素直に従って、入ったドアから出た。そして、気のない廊下の突き当たりまで進んだ。それから頭を巡らし周囲を窺った。だれもないことを確かめると、壁を向いたまま、左腰のバンドに通し、隠し持っていた刀を右手で抜いた。取り出した刀身を胸の前に掲げると、切っ先から柄までゆつくりと目を凝らして見た。赤黒く錆びていたが、ずしりとした手応えが感じられた。Y少年の目がびかりと光った。「よしこれで刺し殺せる」。彼はそうつぶやき、そして、その言葉を噛み締めるかのようには口に口をへる字に結んだ

ある。鏢はなく、白木の鞘に納められていた。

Y少年はこの錆びた刀身を愛でるように再び下から上へゆつくりと目を移し、さらにその目を下へと落とした。赤錆びた刀身を改めて見るとやはりいくばくの不安が頭をもたげた。しかし、その不安を振り払うように柄を強く握った。二度目に両の手で握った。やはり柄は短すぎた。右手をしっかりと柄に掛けると左手は柄からはみ出し、小指と薬指が刃を握ることになってしまった。これではこの両指を切ってしまうことになり目的を果たすことはできない。

「持ち方を考えなければ」、そう呟くと彼は静かに刀身を鞘に納めた。途中で何かに引っ掛かるような抵抗がした。しかし、少し力を入れるとすっと納まっていった。「やはり確かめてよかった」と、少年は思った。そして、柄を上にして学生服の上から固めに締めたバンドに通した。さらにその凶器が外から見えないようにジャンパーで上から覆った。さらに、ジャンパーの上から柄を握り締め、用心深く位置を確認した。Y少年はふうと大きく息を吐いた。吐いた息と共に雑念も体内から排出されたように思えた。「思いの外自分が落ち着いている」とつぶやきながら、顎の辺りを左手で撫でた。そして、元来たドアのノブに手を掛けるとゆつくりと開け、会場に入った。歩を進めると差

しこんだ短刀が太ももに当たり、決行時には邪魔になるのではないかと不安になった。

2

この時、日比谷公会堂からおよそ三百七十キロ離れた仙台の地で東彦は高校生活を送っていた。二年生であった。彼の教室では五時限の日本史の授業が行われていた。彼の好きな教科ではあったが、彼は机に俯せになり微動だにせず、まるで彫像のように固まっていた。机に押しつけられた唇が醜く歪み、開いた唇の端からよだれが流れ落ち、机のその部分が濡れて黒い固まりとなっていた。いびきこそかいてはいなかったが、熟睡の状態であった。

東彦が在籍する仙台高校では十月十五、十六日の両日、創立二十周年記念の文化祭「仙高祭」が開催されることになった。東彦は生徒会長兼実行委員長で、他の数人の実行委員と共にこの週の初めから学校に泊まり込んでおり、三日目を迎えていた。十六歳という若さはち切れる年齢とはいえ、視聴覚室の暗幕にくるまり、板敷きの床に寝て過ごす生活はかなり体力を消耗させていた。

日本史担当は太田瀬之輔先生である。黒板には先生手作

りの江戸時代の年表が貼られ、先生はその表を指示棒で指し示しながら熱弁を奮っていた。棒を持つ先生の手はぶつくりと厚みがあり、白いものがまじる頭髮は薄くなっていた。顔は脂肪たっぷりで、目も鼻もその厚い脂肪層に埋もれているようであった。もちろん、お腹も満月と形容するにふさわしいほど膨らんでいた。

「要するに」というのが先生の口癖で、話の脈絡に関係なくその言葉を連発していた。そんなことから生徒たちはだれも「太田先生」とは呼ばず、「要するに」と呼んでいた。先生の歴史観は弁証法的唯物史観で、当然ながら授業もその歴史観を基に行われていた。江戸時代も概括的に「生成・発展・消滅」と捉え、説明をしていた。そして、社会を動かすのは生産力と支配者階級と被支配者階級の力関係であり、人間の意識も文化もそれらに規定されている。発展する生産はいずれ封建的経済体制という殻を打ち破らざるを得ない。明治時代とはこの封建的経済体制を打ち破って樹立された資本主義経済体制であると。

先生のこの歴史観は東彦には極めて新鮮であった。中学校までの歴史の授業と言えば事件や事象、そしてその年月などを記憶するという味気ない教科であった。世界史も日本史も学習の重点は暗記であった。東彦は、これが学習か

と疑問にさえ思っていた。しかし、「要するに」の授業ではその時代に生きる人々の姿が生きて見え、事象の因果関係を社会の動きの中で理解し、考えることはおもしろかった。つまり「やらされる授業」ではなく「興味を持って学ぶ授業」だった。興味は意欲につながり意欲は楽しさに転化していった。他方、「先生の授業は受験に役立つといい」と嫌う生徒もいたが、多くは事象を因果関係の中で理解しようとする先生の授業は分かりやすいと受け止め、人気があった。

東彦は、先生が勧めてくれた三浦つとむ著の「弁証法はどういう科学か」という本を読んで以来、先生の授業がより一層理解できるようになっていった。そして、先生の史観が弁証法的唯物論史観に基づいていることを理解したのである。さらに、この時「歴史とは科学であり、思想である」ということを直感し、震えるほどに感動したのであった。東彦が在籍していた仙台高校は一応進学校であった。その関係で、受験に集中すべき三年生の生徒会長は避け、二年生が担うことになっていた。彼が生徒会長になったのは彼の意思ではなかった。二年生たちの強力な推薦、説得によるものであった。

東彦が仙台高校を受験し、その合格の報―この当時、ラ

ジオで合格の速報をやっていた―を聞いたとき快哉を叫んだ。そして、「ようし、これで田沼を見返してやれる」と拳を握った。というのは、彼には、彼が中学生の時所属していた剣道部顧問の田沼先生との軋轢、どちらかというところ先生に対する恨みがあったからであった。

東彦は三年生時、部の主将であった。この年の夏、恒例の仙台市中学校体育大会が開催された。当然、東彦が所属していた長町中学校剣道部も大会に参加した。この大会では東彦は優勝の文字しか見ていなかった。自分の技倆、部員たちの力量に絶対の自信があったからであった。何しろ、全国高校体育大会剣道大会で優勝した高校の生徒たちと半年ほど合同練習をして来たからである。しかも、東彦は三年生と次期主将の二年生を除いた他の生徒たちには負けることがなかった。

全国大会優勝の高校生相手の練習は予想も出来ないほどの激しいものであった。特に強かった東彦には容赦がなかった。いわゆる「可愛がる」という言葉に表現されるように、掛かり稽古の回数が他の部員より圧倒的に多かった。しかも容赦がなかった。「生意気」とも見られていたのだろう。夏休みに入ってから一段と激しくなった。足払いや突き倒しさえもあったほどであった。練習の合間の五分

休憩が天国のような思いであった。この時、東彦は初めて血反吐を吐き、血の混じった小便をするという過酷な体験をした。それでも根を上げずに自らの腕を磨き、鍛えることに邁進したのだった。「絶対という自信」はこういう裏付けがあったからであった。

市の大会では案の定、長町中学校剣道部は対戦校を次々と破り、優勝をものにした。問題は個人戦であった。東彦はこの個人戦で自分の本当の実力が分かると思っていた。もちろん、東彦は「当然主将で、部一番の実力者である自分が指名される」と確信していた。他の部員たちも、応援に駆けつけてくれた先輩たちもそう思っていて、「早く準備をしておけ」と言ってくれたほどであった。ところが、顧問が呼んだのは東彦ではなかった。三年生を差し置いてなんと二年生の松下を指名したのであった。三年生は東彦の他にもう二名いた。彼らも無視されたのだ。東彦は一瞬呆然となった。先輩たちも啞然としたような顔で見つめ合っていた。その中で松下だけが「さも当然」というように顔を緩めていた。しかし、少し間を置いて東彦は「あつ」と思った。

試合の一週間ほど前、部員同士が雑談していた中で、松下が「夕べ田沼先生が家に来たんだ。酒を飲み過ぎて帰り

はタクシーだった」と。それをさも得意そうに話していたのを思い出したのである。しかも、その翌日、松下の父親が体育館に顔を出している。手には片手では持ちきれないほどの紙包みを持っていた。多分、田沼先生への差し入れに違いなかった。そこまで思い出すと「ははん、松下の親父は先生を買収したな」と思った。田沼先生は東彦の母方の実家と遠縁にあたる。そんなことから母は先生に関するいろいろな情報をよくつかんでいた。「田沼先生は酒に意地汚い」と母が口にしていたことなども東彦の耳に入っていた。

先生は松下の父親の誘いとうまうまと引つ掛かってしまったわけである。そう思うと東彦の心に怒りが猛烈に込み上げて来た。しかし、東彦は、その怒りをじつと堪えた。そして、「がんばれよ、落ち着いて行け」と、主将らしく松下に声を掛けた。松下は東彦の気持ちも知らぬげに、面の奥で東彦へにこりと笑いかけていた。だが、松下は一回戦で簡単に敗退してしまった。個人戦に出場した選手は全て三年生である。二年生と三年生では練習量の上で一年間の差がある。それは技量の差にも繋がる。しかも、出場したどの選手も自チームで一番強い者たちである。松下の敗北は当然の結果であった。

この市大会の半月後、県大会が開催された。長町中はこの試合でも順調に勝ち、決勝戦に進んだ。相手校は県北部にある栗原中学校であった。決勝戦に勝ち進むだけあって選手もつぶ揃いで、気力も充実しているように見えた。東彦の部の選手たちも「強そうな相手だな」と、顔を見合わせながらつぶやいていた。それをみて東彦は内心まずいと思った。怖じ気づいているように見えたからである。「みんな、宮城農業高校との夏の合宿を思い出せ」と声を掛けた。さらに「これまでの練習は絶対に裏切らない。自信を持って」と発破を掛けた。東彦の言葉に選手たちは落ち着きを取り戻したようであった。東彦は少しばかり安心した。このことは東彦に有利に働いた。主将として部員たちの気持ちや行動に気を配ることで、自身があれこれと考えたり迷いが生じたりする隙間がなくなつたからである。さらに平常心を保つことに繋がっていくことにもなつたからであった。それでも気を落ち着かせなければいけないと時間を見計らい少しの間、瞑想をした。そして、目を開けた時に「悔るな」と心の中で強く言い聞かせた。

やはり栗中は強かった。「決勝戦に進むほどの力を持っているな」と内心感心をした。案の定、勝負は大将戦に持ち込まれた。相手の選手は、やはり堂々としていた。身長

は東彦より少し高く、一七〇センチほどあると見た。着けている防具は一見して漆塗りの胴と分かった。その左胸の黒地の上に金色の家紋が描いてあり、特注品に違いなかった。東彦の着用防具は、学校予算で購入された大量生産のもので、その品質の差は歴然としていた。しかし、「防具で試合をするわけではない」と東彦は思った。そう思った時、「我ながら余裕があるな」と苦笑いをした。試合にまさに臨もうとしている時に、着用している防具の善し悪しなど考える者などいるはずがないからである。そして、東彦は「おれは意外と落ち着いている。勝てる」と自身に暗示を掛けた。

東彦と試合相手は躊躇の姿勢で互いの竹刀の切っ先を合わせた。相手の目に己の視線を合わせる。相手は睨み返して来た。東彦も負けじと睨み返した。「始め」という主審の掛け声に両者は立ち上がり、さっと間合いを取ると正眼に構えた。構えると同時に東彦は「チェー」という気合いを發した。相手も負けずに気合いを發して来た。その時、相手が目を瞑るのを見逃さなかった。東彦はもう一度掛け声を發した。相手も返して来る。やはり、目を瞑っている。東彦は正眼の構えの竹刀をやや上にあげ、竹刀の切っ先を相手の喉元につけ、はたと相手強く睨みつけた。突き

は中学生には禁じ手であったが、相手の意表を突き慌てさせようという東彦の作戦であった。そして、一步前に歩を進めた。果たせるかな、相手はその動きに押され一歩下がった。下がった相手の喉元めがけ、竹刀をついと突きだした。相手は竹刀を払いに出てきた。東彦は己の竹刀をくると回転させてその動きを外した。相手の目が上下に動いた。そして、相手も竹刀を前に突きだしてきた。瞬間、東彦は「チェー」という掛け声と共に竹刀を上段に移動し、さらに一段と高い気合いを掛けた。相手もそれに応じ、負けずと高い掛け声を出してきた。目はやはり瞑っていた。その瞬間を東彦は見逃さなかった。「イエー」という掛け声と共に右前足を踏みだし、踏み出した足で床を蹴った。その時既に東彦の竹刀は相手の面上寸前であった。相手は避ける間もなかった。パンという乾いた音が体育館に響いた。

主審、副審の白い旗がさつと上がった。そして「一本」という主審の声が響いた。同時に、東彦の自陣から大きな拍手が湧き起こった。しかし、東彦は「調子に乗るな、まだ勝負は決まっていない。これからだ」と、自らを叱咤激励した。

相手の席からは「二段打ちだ」と声が飛んできた。さら

に「稽古を忘れるな」と、掛け声が掛かって来た。恐らく相手顧問の先生からに違いなかった。

二本目が始まるや相手選手は声を張り上げて気合いを出し、盛んに剣先で牽制をして来た。さらに両足を前後に踏み出したり、後退させたりして来た。落ち着きないその動作に「焦っている」と東彦は判断した。東彦は正眼に構えるとじつくりと相手を見据え、その動作を窺った。相手は、間合いを詰めることもなく「コテ、メン」と続けざまに攻撃して来た。東彦は「ははあん」と思った。「二段打ち」

「稽古を思い出せ」という顧問の掛け声は「稽古で練習した二段打ちをやれ」ということだったのだ、と納得した。東彦は相手の動きをさらにじつくりと見た。相手が籠手から面打ちに動作が動いたとき相手の竹刀が伸びきっていた。しかも顔は上がり、目は完全に天井を見ていた。さらに胴はがら空きであった。これなら「胴が打てる」と確信した。しかし、「一発で決めなければ」と思った。失敗すれば、相手に自分の攻撃法を教えることになる。そうすれば警戒し、同じ攻撃法を食らうことはないだろうと思ったからである。

東彦は敢えて後退した。相手が二段打ち攻撃をしかける度に一、二歩と退き、あるいは横に避けた。その動作が二

3

度続いた。さすがに相手は間合いを詰めてきた。三度目の攻撃が来た時であった。東彦は歩を動かすことなく上体を少し折り、身を沈めた。読んだとおり相手は籠手を空ら打ちに来、ついで竹刀を大きく振りかぶった。「今だ」と東彦は心の中で叫んだ。沈めた体をバネにし、体重を右足に載せ、その右足で強く床を蹴った。腕を畳み、竹刀を左後方肩の上に乗せ、沈めた体ごと相手の空いた胴にぶっつけ、思いつきり竹刀を水平に払った。「バーン」という音が試合場に響いた。審判委員たちの白い旗がさつと上がった。見事に「抜きドウ」が決まったのである。一本目のメン、二本目のドウと、大技二本で東彦は試合を決めたのであった。自席に戻り面を外し、被っていた手拭いを外した。面で押さえつけられていた汗がどっと噴き出して来た。東彦はその汗が誠に心地よく感ぜられた。初めての経験であった。「努力は嘘をつかない」という言葉が自然に脳裏に浮かんで来た。

東彦の中学三年生の夏、秋はこうして終わった。東彦はこの後、部活動に一切顔を出さなかった。しかし、「高校では剣道部に入り、全国大会優勝を目指す。いずれ本物の剣士になる」という決意、願望はますます強くなっていった。

Y少年は昭和十八年（一九四三年）二月二十二日生まれで東彦とは同年の生まれである。東彦は十一月二十二日生まれであるので同年でも一学年下にある。少年は「東京都台東区谷中初音町で出生致しました」と供述している。ところが、彼の父親が警視庁に呼び出され、息子についての調書を取られた際、「生まれたのは下谷の入谷です」と答えている。調書を取った警部補の警察官に息子の供述書との違いを指摘されると「それは産院です」と答えた。昭和十八年にはかなりの数の子どもたちが生まれているはずである。十七年後どれだけの子どもたちが自分の生まれた産院を記憶しているであろうか。恐らくほんの一握りに過ぎないと思われる。また、産んだ当人である母親すら出産の産院の住所はほとんど記憶していないのではないかとと思われる。Y少年の記憶力のすごさが窺い知れる。同時に彼の父親もその産院の住所、そして、少年の生年月日を正確に記憶していることに感心せざるを得ない。

Y少年の父親は、戦後インドネシアから復員すると国税庁の役人となった。その後、少年が小学校三年生頃に警察

予備隊に異動し、一佐に昇進する。旧軍の呼称で言えば大佐である。

父親は子どもたちのしつけに対しては厳しく、「私は躰については一理屈を持っている」。「年配者に対して失礼なことをすれば尻をむかれてピシんとやった」と述べている。「Y少年の兄は「父親に殴られている幼児時代の自分たちの姿がいくつもある。多くの場合、それは礼儀に關」してだったと述べている。父は、「自由主義者」を標榜し、「礼儀作法を守ることは自由主義の第一歩」という信念を持っていた。

この父のしつけを当時に照らして見た場合、厳し過ぎたかといえども言えない。東彦が育った東北の農村地帯では、子どもに対する体罰は日常茶飯事で、言葉より先に手が飛んできた。そして、ほとんどのおとなたちはそれを体罰、暴力などとは考えず、当然のしつけと考えていた。少年の父は東北帝大を卒業し、自費出版ながら著書二冊を持つインテリであった。妻を「あなた」と呼び、子どもたちに寝物語で戦国時代などの昔話をしてくれるような夫であり、父親だった。少年は小学三年生の頃、ターザンの映画が大好きであった。そして、「供述調書」の中で、「ターザンの映画が来ると全部とってよい位父にねだつ

て見にいった」と回想している。もし、このような父親を持つ友人が身近にいたとしたら多くの少年は羨むこと必定だったろう。しかも、勉強も教え、大学に編入した後は教科の中国語修得のためにラジオ講座での英語や中国語の学習を勧め、テキストさえ購入してくれている。単なる「しつけに厳しい父親」ではなく、子に対する強い愛情を秘めていたように思える。

このような父のしつけもあつてか、Y少年の「礼儀、言葉遣いは折り目正しく」、彼に接した大人たちを感服させていた。しかし、その反面、愛国党に入党して以後、デモや集会に対する攻撃は「凶暴」といえるほど激しくなっていく一方であった。

父親はその仕事柄転任が多く、少年が中学二年時には札幌に転勤している。昭和三十三年四月、少年は札幌にある私立光星学園高等部に入学する。

当時、教職員の勤務評定、道徳教育の反対闘争が盛り上がっており、少年は日教組への反発を強めている。その反発の内容というものは概ね次のようなものであった。

「日教組が勤評、道徳教育反対闘争を全国的にやり、先生が授業をやらす、デモをやったり、ストをやったりするので、先生を指導している日教組に反発を感じた」。また、

デモを同調的に報道する新聞に対しても、憤りを持った。そして、このようなことが積み重なり、結局は「どこかの右翼団体に入って反共運動をしよう」と思うようになるのである。Y少年十五歳、高校一年生の一学期頃のことである。

入学した年の八月、やはり父親の異動で練馬区の官舎に転居。Y少年は、父の恩師である小原国芳が学長を務める玉川学園高等部一年に編入する。少年は二期の始業式から感激した面持ちで帰宅する。「小原先生の話聞いて終わって時計を見たら三時間かかっていた。終わったら身体がこわばって痛かったけど、聞いている間は全然気がつかなかった」と父に述べている。少年のこの言葉を聞いた父親は「すっかり安心というより喜んでしまった」のである。

Y少年は玉川学園のことを「ミッションスクールの部類に入る学校で、幼稚園から大学まであり、上級生と下級生の間は兄弟のような家族的雰囲気です。授業を自由選択でき、一応単位だけ取れば後は自分の好きな授業を自由に受けられ、個性を生かして伸ばしていくという教育でした」と評価している。

また、小原学長の話については「『道徳教育は必要で日

教組の生き方は間違いだ。教育勅語は復活すべきである』と、右翼的な臭いのない話し方で、日本人としての人の道を教え、個人的にも魅力のある方で私が過去に通学した学校では一番気持ちにぴったり合った学校でした」と。

少年の言葉の通り、彼が過ごして来た学校生活の中でこの玉川学園が最も快適であったのである。しかしながら、彼は後にこの玉川学園から自らの意思で去っていく。

Y少年は動物好きであった。中学校では山羊を、玉川学園では鶏を熱心に飼育した。「この動物に対する優しさは祖母にも向けられ」、「祖母が散歩から遅くなると必死で町中を探し歩く」ほどであった。しかし、学校では友人が少なかった。それは短期間で転校を繰り返した、ということが主たる要因であったと思われる。小学校で一回、中学校で二回、高校で一回の転校があった。

中学校では入学した渋谷区立代々木中学校にはわずか七ヶ月ほどしか在学せず、その後杉並区立和田中学校へ転校している。この学校も在学期間はわずか四ヶ月ほどではない。二年生時には札幌市立柏中学校へ転校している。高校では札幌市にある私立の光星学園高等部に実質四ヶ月ほどしか在学せず、八月に玉川学園に編入している。「私の性格はどこへ行ってもその環境に馴染む方なので

転校で苦痛を感じることはなかった」と少年は述べている。確かに小学校の時の級友の一人は彼のことを「物真似などをしてよく人を笑わせていた」と話している。また、中学校の級友も「快活だった」と述べている。

中学生や高校生時代というのは、一般的に生徒同士の結びつきが非常に強くなる。友情というものが大切にされる時代である。それだけに自我の形成には友人からの影響が大きい。親にも先生にも話せないことを友人にだけはそつと話すとか、女の子についての際どい話も友人だからこそ話せたなどという経験は多くの者にはあったはずである。しかし、Y少年には秘密を打ち明けたり、気楽に内緒話が出来た友人はいたのだろうかと思問に思う。

他方で、彼は政治的な問題については強い関心を持っていた。何しろ小学校四年生の時には新聞を読み、ソ連や共産党、社会党、労組などの活動を批判し、非難していたのである。尋常な子ではなかった。中学生になってからもそのような傾向はますます深まっていた。中学三年生のころには「左翼のデモに行く」先生を「怪しからんと思ひ」、「先生はどうしてデモに行くのか、先徒とデモとどちらが大切か」と詰問さえしている。非は先生側にあった。さすがに先生はこの問にはまともには答えられず「戸をピシ

として「再軍備賛成論」を説き、「警職法改定擁護論」を主張した。

このような姿を見た級友たちはY少年に対し距離を持ち、敬遠するようになったのもいたしかたなかったろう。

元よりY少年は感受性豊かで、繊細な感情を持つ少年であった。彼がこのような冷たく疎遠と思える雰囲気を目ざとく察知し、「周囲から浮いている」と自覚したことは確かであろう。しかし、彼はそこで怯むことはなかった。同世代の少年たちとは違って、彼の心には「大義」が既に形成されていたからである。そして、彼はその大義を実現するためまっしぐらに進んでいくのであった。

4

仙台高校に入学した東彦は入学式の翌日の放課後、直ぐに体育館に向かった。バスケット部が体育館の半分ほどを使って練習をしていた。部員の数も多く、練習に活気があった。後に分かったことであるが、前年のインターハイでは全国大会に出場していた。県内でも有数の強豪チームであった。後の半分ではバドミントン部とフェンシング部が窮屈そうに練習していた。フェンシング部も市内ばかり

やりと締めて出て行った」のである。先生の心中は「やられた」と思う一方、「小生意気な小僧め」という憎しみが強く生まれたに違いない。

高校生の頃には彼は「左翼の日本赤化を阻止する運動」を実行することを真剣に考え始めている。このような強い意思、考えを持った者が例え教師との論争があったとしても安易には妥協は出来なかったのは当然のことであつたろう。この頃の日本の社会では政治的な問題に事欠くことはなかった。教育分野では道徳教育問題、勤務評定問題、社会問題では警職法改正、さらには安保改正問題と目白押しであった。当然、社会科の授業などではこのような問題も話された。

しかし、こういう政治的な問題になると、普段おとなしくみられていたY少年は、一歩も引くことがなく持論を展開した。その論旨は整然としており、教師側もたじたとになったに違いない。そのような少年に対し「一本筋が通っている」と評価する同級生もいた。だが、向きになつても見える反論に、教師側、特に若い教師の中には「小生意気な右翼野郎」と舌打ちをしていたのも事実であった。

こういういわば孤立無援のような状況では多くの場合、人はより頑になり、また闘争的にもなつて行く。彼は昂然

か県内でも名のおつたチームで、過去幾度か全国大会に出場していた。しかし、東彦の目にはこれらの部活動は全く入って来なかった。ひたすら剣道部の練習風景を探した。狭い体育館である。剣道部があるかないかは直ぐに判別できた。「剣道部は体育館で練習はしていないんだ」と即座に判断した。東彦にすれば中学校での練習場所が体育館であったがため、そのことしか念頭になく、てつきり高校も同様と思ひ込んでいたのであった。

「ははあん、剣道場があるんだな。さすが高校だ」と納得し、感心した。校舎探検を兼ねて探してみようと体育館を出た。校舎は体育館の北側に平行して位置している。向かって左側が新館、コンクリート建て三階、新館と本館の間に木造二階建て校舎がある。この一階には麺類を提供する学生食堂があった。本館の一階には職員室、校長室、保健室、そして宿直室があった。いわゆる管理棟である。この本館の東端に続くのがやはり二階建ての木造校舎であった。ここには柔道部やレスリング部などの格闘技の部室兼練習場があった。この位置関係は校舎説明で説明を受け、なぜか東彦はそのことを記憶していたのだった。

畳を叩くパンという軽やかな音が廊下まで響いていた。やはり柔道場があった。近づくにつれ部員たちの掛け声や

受身で畳を叩く音などが鮮明に聞こえて来た。東彦はほとししながら挨拶の言葉を口の中で繰り返した。しかし、道場の入り口に来ても剣道練習中の甲高い気合いや竹刀の打ち合う乾いた音が聞こえない。東彦は不安になって来た。

「一体剣道部はどこにあるんだ」と、怒りさえ湧いて来た。そんないらいらに近い気持ちで柔道場を過ぎた。隣はレスリング部であった。レスリングの道場の隣は生徒会の会議室であった。それを知った時、東彦は絶望的な気持ちに陥ってしまった。しかし、未だ一縷の希望を捨ててはいなかった。思い切つてレス部の引き戸を叩いた。叩いても返事は返つて来なかった。当然のことであった。だれもドアを叩いて入る者などいなかったからである。また、練習に熱中している場合など扉を叩く音など聞こえもしなかったのである。そんな事情を少しも知らない東彦はさらに遠慮がちにドアを叩いた。この時は東彦に幸いした。たまたま休憩を取ろうと、組み手をほどこうとしていたキャップテンの中林の耳にその音が届いたのであった。

「ハイ、開いていますよ。どうぞ」という太い声が返つて来た。東彦は半身が入るほどに恐る恐る戸を引いて「失礼します」といった。むっとした汗臭い臭いが東彦の鼻腔を襲つて来た。そんな汗臭さは東彦にはお馴染みであった

はずである。しかし、半年ほど剣道の練習から遠ざかって来た東彦に、それは異臭に変わっていた。一瞬たじろいだ。真新しい制服を来たそんな東彦を中林は直ぐに新入生と分かった。

笑顔を微かに浮かべながら「おう」と先ほどよりさらに大きく、大きな声で応え、そして、「入れよ。遠慮するな」と続けた。彼の盛り上がった筋肉の身体の下には練習相手がマットの上に組み敷かれたままであった。押さえ込んだ姿勢のまま顔を東彦に向けた。

「入部希望者か」と問い掛けて来た。その大きな声に東彦はつられ「はい」と応えた。

「ありがとな」

中林先輩は顔をほころばせていた。

「おまえが新部員第一号だ。しつかり鍛えてやるから安心しろ。一年も経たないうちに筋肉粒々の体になるよ。とにかく大歓迎だ。何しろ我がレス部はオリンピックでメダルを取得した先輩を持つ伝統あるクラブだから」

しかし、先輩の話を聞きながら、東彦は自分の勘違いに気付いた。

「すみません。入部ではなくちよつとお尋ねしたいことがあつて来ました」

中林は明らかに失望した面持ちであった。
「何だ、入部希望者ではないのか。それではどんな用事なんだ」

他の部員たちも練習を休め、成り行きを注視しているようであった。

「あのう実は」

東彦が遠慮がちに話を切り出すと、

「はつきり言え」

と声が飛んできた。

ここで気持ちを萎縮させてはならないとぐつと拳を握りしめた。

「すみません、剣道部を探しているんです。剣道部はどこでしょうか」

一瞬練習場内がシーンと静まり返つた。

「剣道部はないよ。残念だけど」

中林が気の毒そうに答えた。

「ないんですか」

東彦の声がなかった。

「どうしてないんですか」

「どうしてって言われても困るんだけど、ないのはいないんだよ」

東彦は愚問を發してしまったと顔を赤らめてしまった。しかも、こんな愚問に怒鳴りつけられても当然であるのに先輩は丁寧に応えてくれている。そのことに感謝したかった。

「せっかく剣道部に入部したくて訪ねて来てくれてありがたいが、そういう事情だ。まあ諦めるんだな」

「いえ、親切に教えてくださいますありがとうございます。それでは失礼します」

東彦は深々と頭を下げた。そんな東彦に、中林はやんわりと話し掛けてきた。

「力落とすなよ。まあ、気が向いたらまたレス部に遊びにこいや。選手ばかりでなくマネジャーも募集しているからね」

「また来いや」

と中林の声に他の部員の声も続いた。

東彦はキャプテンや部員たちの優しい心につれて涙が出そうになった。そして、「仙高はいい雰囲気な学校だ」と心がほっこりとして来た。しかし、そう思う一方で、納得しきれない思いが湧いて来るのを抑えようがなかった。そして、「剣道部がないなんて信じられないよ」と、ぶつぶつと不満を漏らしながら下校の途についた。手に持つカバ

ンがいやに重たく感じられた。

東彦の夢、「日本一の剣士になる」という夢は呆気なく潰え去ってしまったのである。東彦は登校の意欲さえ減少してしまった。そして、彼は自分を激しく責めた。剣道部のあるなしぐらいは、受験する前に確かめておくべきだった。もし事前に仙高には剣道部がないことが知っていたら、絶対に受験しなかったはずなのである。

しかし、東彦が元來持っていた好奇心、さらにレスリング部の先輩たちが示してくれた優しさが彼を救ってくれた。入学して間もないこの時期、東彦はまだ友人もおらず、放課後、図書館に行く以外何もすることがなかった。それで彼は、しばらく学校の様子を探ったり、部活の様子を見てみようと思った。その上で気に入った部があったら入部しようと思ったのである。見学した部の中では生物部、美術部、フェンシング部に興味を持った。生物部の顧問は東彦が受けている生物の授業担当の庄司先生であった。先生はなかなかユニークで、授業もほとんど実験や実習が中心であった。先輩の話によると試験も教科書、参考書の持ち込み自由であるという。また、後に分かったことではあるが、詩人で同人誌の主宰をしていた。部員たちも自由に研究や調査をしているようで東彦はだいぶ心を動かされた。しか

し、何といっても心惹かれたのは美術部であった。東彦はこれまで水彩画の展覧会で受賞の経験があり、絵を描くことは好きであった。しかし、油絵には無縁であった。だが、美術室を訪れた時のことであった。その時は、たまたま担当の桜井先生しかいなかった。東彦は桜井先生の美術の授業を受けていたので、先生のことは既に知っていた。しかし、先生は東彦のことを知ってはいなかった。先生からすると全くの初対面である。東彦がドアを叩くと「どうぞ」という先生の声が返って来た。東彦はドアを開けると油絵の具の匂いがプンとした。白髪混じりでウエイブのかった髪が肩辺りまであった。背広の肩辺りに白いフケが散見した。

「どうしたの」

先生は薄い唇を開き、小さな声で尋ねて来た。

「ちよつと部活の様子を聞きに来ました」

東彦は正直に答えた。

「部員たちは隣の美術教室か写生に行っていると思うよ」

「ありがとうございます。でも、よろしければ先生から直接お話を伺いたいのですが」

「ああいいよ。その隅にある椅子を持ってこちらに来て座りなさい」

突然の来訪にも関わらず極めて丁寧に対応された。しかも、従前から知っているかのようにぎつくばらんな口調でもあった。

東彦は心の内で「まるで古くからの教え子を迎えるようなもてなしかただな」と感激してしまった。先生は「学校の雰囲気は慣れたか」とか、「どんな画家が好きなのか」などと、東彦の学校生活の様子などを聞いてくれた。東彦は先生から問われるままに素直に答えた。東彦は先生の好意に甘えて「剣道部のないこと」を尋ねてみた。

先生は「ウーン」としばらく天井を見詰めて口を開いた。「それはね、戦争に負けたことに関係するんだよ」

東彦が全く考えも及びつかない返答してきたのである。「戦後ね、日本伝統の柔道や剣道を学校で教えることを禁止する通達がGHQから来たんだよ。これらの武術は日本の軍国主義・侵略主義と密接に結びついた悪だとね。無茶なことにつけここに極まるだよ。実にけしからんことだった。その後、その通達は解除されたが、仙高では解除後も剣道部復活の機運や指導する先生もなく、今日まで来たというわけなんだよ」

「なるほど」

東彦は深く頷いた。と同時に、戦争の影がこういうとこ

ろまで及んでいたことを知り、改めて驚いた。そして「剣道部は諦めるしかないな」と再び思った。

「東彦君、せっかく希望を持って入学したんだ。君のためにもこれから入学してくる後輩のためにも、君が卒業するまでに部を創るといいよ」

その話を聞いて東彦は思わず「えっ」と声を上げてしまった。

「そんなことできるんですか」

東彦は思わず目を丸くしてしまった。

「それは君の気持ちと努力次第だよ。いずれにしても最初は同好会からのスタートになるけど」

桜井先生はいとも簡単に言うのだった。

東彦は額の皺が深くなった先生の顔をまじまじと見つめた。そして「この先生は教えるだけの先生ではない。生徒の立場で考えてくれる先生だ」と、感服してしまった。教員にとっては厄介ごとであるはずの創部をいとも簡単に生徒に勧める、まるで近くの駄菓子屋から煎餅でも買ってくるような言い様である。生きる上での指針をも与えられたような気持ちであった。そして、この時の桜井先生の助言を東彦は忘れることはなかった。二年後、東彦が三年生の時に、中学校の剣道部の後輩数人を含め、十人ほどで剣道

愛好会を発足させることができたのだった。

「先生、美術部入部は少し考えさせてください。でも時々先生にお会いしたいのでこちらに伺ってもよろしいですか」

東彦は厚かましいと思ったが先生に頼み込んだ。

「ああいいよ。いつでもおいでよ」

桜井先生は東彦のこの厚かましい願ひ事に笑顔で応えてくれた。このことを契機に東彦は再び希望を持って学校生活を送れるようになった。もちろん桜井先生詣でも欠かさなかつた。とにかく先生といると気持ちが安らぐのだった。中学校でも持てなかつた何でも相談できる「恩師」と呼べる先生を入学早々に持てたことは、東彦にとって最大の喜びであり、幸せでもあった。

東彦はしばらく「帰宅組」として、時に授業終了後真っ直ぐ帰宅したり、時に校内をぶらぶらしたり、図書館で読書にふけつたりしていた。

五月末、爽やかな日であった。なまつた身体を少しでも鍛えようと徒歩で帰宅する試みをした。学校から自宅まで二時間近くはかかるだろうと思われた。しかし、「疲れたら市電に乗ればいい」という極めて安易な気持ちで歩き出した。自宅まではほとんどなだらかな下りという地勢であ

る。まだ午後三時半ごろではあったが、珍しく風もなく、

暖かな陽気はたつぷりと残っており、歩くにはもつてこいであつた。西公園の前を過ぎ大町の交差点にかかつた。この交差点を右に折れば広瀬川に掛かる大橋があり、その先には仙台城趾がある。左におればケヤキ並木で有名な青葉通になり、その通の突き当たりは仙台駅である。東彦はどちらにも曲がらず真っ直ぐ進んだ。この大町交差点から仙台高等検察庁にかけては大きな勾配のある下り坂である。自然と歩幅が大きくなっていった。前方には評定河原野球場の一部が垣間見えた。球場のすぐ脇を広瀬川が大きく蛇行しながら流れている。陽光にきらめいて軽やかな音を立てて流れるせせらぎが目には浮かんで来る。東彦は何か体の中から余分な力が抜け、風が体を吹き抜けていくような感じがした。身体が軽くなり、全てから解放されたような気持ちになつた。「幸せってこういうことか」とうれしくなつた。

市電の検察庁前停留場が目に入った。そして、何気なくその視線を右の方に移した。片平町通に入る角に縦一メートル、横三十センチほどの立て看板が目に入った。風雨にさらされて来たその木地には文字が見える。少し滲んでおり、遠目によく「抜刀術指南」という墨文字が見えた。

東彦ははつとなつた。そしてにわかに動悸が激しくなつた。無意識に足がそちらへ向かつていった。「指南」という文字の隣には小さく「道場はすぐ裏 主・伊東齊吾」とあつた。東彦はその文字の通りに従つて片平町通に入った。すぐ横道があり、その横道に入るとまた看板があつた。先ほどの看板の一・五倍ほどの大きさであつた。「蔭流 抜刀術指南道場」と、堂々たる字であつた。筆勢に躍動感があつた。東彦はその字を見てうれしくなつた。東彦のような少年にも判読できる字体の楷書であつたからである。平屋の家はかなりの年月経っているようであつた。瓦や壁のくすみ具合からそれと知れた。しかし、玄関前から南に続く庭の樹木はよく手入れされていた。形の良い古木の梅は透き通るような緑の葉を一杯に茂らせ、ビー玉のような大ききの実がその葉の間からいくつも見えた。

玄関の格子戸を開いた東彦は奥に向かつて「ごめんください」と声を出した。しかし、その声は、吸い込まれるように奥に消えた。「長い廊下だ」と東彦は思った。七、八メートルはありそうであつた。返事がなかつた。声が届いていないと思つた東彦は、下腹に力を込めて叫ぶように再び声を出した。すると、奥の扉が開き、甚平のような着物を着た男性が「おう」と言いながら姿を現した。総髪

は肩まで伸び、頭は手拭いで覆っていた。藍色の足袋をはいた足が床を滑るように入ってきた。背筋の伸びた姿勢には寸部の隙も見えなかつた。鼻が高く目の窪みは深い。その眼窩がんかの底の眼球が静かな光を含もつて東彦を見ていた。しかし、「銘酒 浦霞」と書かれた洗いざらしの前掛けが何かユーモラスさを醸し出していた。東彦は五十歳ぐらいかなどと思つた。後に四十五歳と知つた。

「こんにちは、看板を見て伺いました」

「それで」

とだけ応え、先生は口を結んだ。しかし、眼は東彦から離してはいなかつた。

「渡邊東彦と申します。伊東先生は私のような高校生にもご指導くださるのですか」

「きみはこの高校だ」

「はい、仙台高校、仙高です」

「なに、仙高。あそこの高校はけしからん」

いきなり叱り付けられ、東彦は腰を引いてしまった。叱られる原因が皆目見当がつかない。

「どこかいけないところでもあるんですか」

東彦の声が少しうわづつていた。

「剣道部がないことは男子校として恥ずかしい。剣の道に

は日本人の魂が宿っている。きみはそう思わんか」

立腹の原因は「剣道部がないことだ」と知ると、東彦の気持ちには直ぐに鎮まった。と同時に、「けしからん」という先生の言葉には「我が意を得たり」の思いであった。急に先生との距離が近づいたような気がした。

「きみはなかなか優秀だ」

「どうですか」

「けしからん」の後の「優秀だ」である。先生の話には飛躍があり過ぎ、次に何が飛び出してくるのか予測がつかない。東彦は思わず身構えた。

「わしの名前をしっかりと覚えて玄関に入つて来ている。大概は、看板の「抜刀術指南」のみを記憶して入つて来るだけだ。中にはそれさえ覚えていない者もいる。武術を学ぶ者は常に周りの状況を頭に入れて、最も肝心なことを捉えて行動せねばならん。武芸者の初歩である。きみは若いながらにそれができている。見込みがある」

門扉を開き、玄関に入るところから入門試験が始まっていたとはさすがに東彦は思いもなかった。しかし、先生の言葉は一つひとつが簡潔で分かりやすく、話を聞いて楽しい。その楽しい気持ちで東彦を饒舌にさせた。看板を見たときから疑問に思っていたことを口にした。

正面の床の間の左右には「剣身不二一如」と「蔭流本邦第一」という軸がそれぞれ掲げてあった。真ん中には大きな達磨の絵があった。

東彦は「あれっ」と思った。「剣禅一如」はよく聞くが「剣身一如」という言葉は初めて目にした。

「先生、『剣身一如』とはどういう意味ですか」

思わず問いかけてしまった。

「きみは質問の多い子だね」と言った。そして、笑みを浮かべながら言葉を続けた。

「若いのによく気がついたな。まさにそれが蔭流の神髄じゃ。奥義といってもよい。蔭流は元々藩の始末役を務めておった。その役目とは謀反など藩への重大な犯罪を起こした者などを隠密のうちに処罰することである。これは全て秘密裏に行われた。汚れ役であり、嫌われ役でもあった。しかし、藩政には絶対に欠かせない職掌であった。従って蔭流は戦前までは表には出ず、ひっそりとその武芸を磨き、伝承してきた。「剣禅一如」とか「剣心一如」などの禅問答のようなものは一切なし。ひたすら剣の術を極めんと精進するのが我が流派の掟である。今流の言い方をすればリアリズムであり、実践の剣だな。そして、極めて至るところが「剣身不二一如」である。剣と身体は別物、対立する

「ところで先生、抜刀術と居合はどう違うんですか」
「まあ、そんなに急くんじやないよ。まずこちらに入りなさい」

そして、先生は上がり框のすぐ右横にある引き戸を開いた。そこは道場であった。広さは五十畳ほどである、と東彦は推測した。道場としては広い方ではなかったが、しかし、個人としてこれだけの広さを維持・管理していくのはなかなか厳しいはずである。

「ところで今のきみの質問は核心を突いておる。居合は言葉のとおり相手の攻撃を躲し、時に相手の動作を利用して斃す。いわば防御の剣術である。これに対し、我が流派の抜刀術は待して討つか、追って斬るかの攻撃のみである。分かったか」

恐らく先生は、東彦が充分理解していないことを見越していたに違いない。それは先生の口元がわずかにほころんでいたことから知れた。

東彦は先生の言葉を噛み締めつつ「いわば全方位剣術だな」と理解した。そして、「分かりました」と小さく頷いた。

先生は道場の真ん中に誘い、座るように命じた。東彦は正座をすると正面に向かうやうやしく礼をした。

ものといつてもよい。身体にとって異物である剣を掌中のものにするためには鍛錬する。「鍛」とは日に千回行うこと、「錬」とは日に万回行うこと。そうして初めて「剣を身体に」「身体を剣に」という現象的には対立する二つを一体化することができる。これが我が流派の目的、即ち奥義ということだ。今の世ではこんなこといつていたらだれも弟子にはならん。しかし、本来の剣術は敵を倒すことが目的で、それ以外の何ものでもない。だが、時代の流れで「心身の鍛錬」とか「心の修業」と精神論が言われてきたが、これはあくまでお飾りじや。本質は殺人剣である。相手を必殺するための術を極めることである。このことをよくわきまえれば、いたずらに剣をもって人を殺すようなことは避けるようになる。どうだ、これでも我が流派を学びたいか。――

深い感動が東彦の身体の中にじわりと広がっていった。と同時に、長年喉元につつかえていた棘がするりと取れたように感じた。というのは、中学校で三年間剣道に励むうちに湧いて来た疑問であった。「今習っているこの剣道が本当の武芸か」ということであった。スポーツとしての剣道ではなく武芸としての剣術を学びたい、そうすれば剣士の心に近づいていけるのではないかと思っていたのである。

伊東先生の言葉で東彦は長年の疑問が氷解していったのである。

「先生、お願いします」

そう言う東彦は改めて座を正し、床に接するほどに頭を深々と下げた。

「許す」

先生は即座に答えてくれた。

「稽古料は」と問うと、

「東彦くんは高校生だからな、それに剣術に対する思いが深そうだから月に千円、いや五百円でよい。但し、その代わり道場の掃除だけはきちんとやってくれ、頼むよ」

東彦はようやく自分の居場所をみつけたような気がした。「捨てる神があれば拾う神もありだ」。世の中はよくしたものだ、と東彦つくづく思った。こうして東彦は薩流の道場に週二、三回通うことになった。

しかし、伊東先生はあまり指導はしてくれなかった。攻撃の「切る、突く」と「払う、叩く」の防御の基本動作を教えてくれただけであった。東彦は「千回の鍛、万回の錬」を心の中で唱えながらひたすら型の練習を繰り返した。その稽古が二カ月ほど続いた後であった。久し振りに道着になった先生が道場に姿を現した。

「だいぶ型が様になってきたな。基本の四動作について話すからよく聞きなさい」

先生は続けた。

「『切る、払う』は円動作、腰を軸にして刀の遠心力に払い振り下ろし、そして、絞り止めなさい。『突く、叩く』は直線運動。腰で刀を絞り込む気持ちでやりなさい。そうすれば柄を握る手は自然に絞られる」

そして、型をしてみせながら教えてくれたのだった。道場の門人は総勢二十人ほどであった。東彦を除くと全員成人で、しかも勤め人であった。彼らの稽古はほとんど土、日、祝日で平日は少なかった。行うにしても六時以降であった。したがって、東彦が稽古する四時以降は彼ひとりであった。

次に先生が教えてくれたのは足裁きと腰の使い方であった。「剣術と剣道の大きな違いは足裁きにある。剣術は摺り足が基本である。跳び上がった、ダンスのように足を細かく前後に動かすことはやらない。身体にエネルギーの溜まりを持ち、そのエネルギーを剣に与え、剣は相手の身体にそのエネルギーを爆発させる。実は刀には命があつて自らの役目を承知しているんだよ。使い手はその刀に方向性と

決めを与えるだけで良い。決めとは振り下ろしたり、切ったり、突いたりした刀を絞り止めることだ。これらの体の動きの基点は足であり、操作の根源は腰にある。剣道の足裁きや腰の使い方ではこの溜まりができないし、腰が身体運動の基軸となれない。動作は腰から始まるということをお肝に銘じておくことだ。よいかね」

東彦は十分な理解はできなかった。しかし、「はい」と小さく頷いた。先生はまた実技を示しながら教えてくれた。「東彦はなかなか筋がよい。鍛錬を続けるならばきっと奥義を極められる。がんばりなさい」

先生は励ましてくれた。

道場に通い出してから五ヶ月ほど経った十月初めの頃であった。その日は授業が四時限であった。東彦は食堂で昼食を終えた後に道場に向かった。いつもより早く稽古を終え、道場の掃除も終わり着替えをしていた時であった。先生が顔を出し、「仕事部屋に来るように」と声を掛けてくれた。仕事部屋は刀の研ぎ場であった。実は先生は研師でもあった。というよりこの研師の収入が先生の生活を支えていたのであった。板敷きの六畳ほどの部屋の前には切手ほどの物から豆腐を縦に二つ並べたほどの大きさまでの砥石がずらりと並んでいた。また木製の桶には半分ほど水が

入っていた。刀掛けには柄が取られた刀身だけの日本刀が三振ほど置かれていた。また、たくさんの鏝が板壁に飾られていた。

先生は直径一メートルほどの丸いちゃぶ台を引き寄せる。「ここに座りなさい」と東彦を招いた。そして、「頂き物だ。お八つの時間が少し過ぎたが食べなさい」と言いながら、最中を二つ置いた小皿とお茶をちゃぶ台に置いてくれた。最中は「白松が最中」といって仙台の名物であった。小豆の粒餡が一杯に詰まって、甘さもほどよく東彦の好物であった。しかし、滅多には口には入らなかった。東彦は昼食に大盛りかけうどん一杯食べただけだった。東彦のお腹はもう既に空腹であった。彼の意図とは別に東彦の口の中にじわりと甘い唾液が充満し、しかも顔がほころんできた。

先生から特別に話があったわけではなかった。学校のことや将来のことなど他愛もない話が続いた。恐らく研ぎで疲れた先生が気分転換にと東彦を誘ったのだろう。長く延びた午後の陽光が仕事場に一条の光を差し込んでいた。そんなゆつたりとした部屋の空気に影響されたのか、不意に東彦の頭の中に浮かんできたものがあった。

「先生、初心者と達人が真剣で立ち合って初心者が打ち克

つ方法はありますか」

と、東彦の口から言葉が衝いて出た。

「ある」

少しばかり間を置いて先生はびしりと言いつつ切った。

「方法は」

東彦は恐る恐る尋ねた。

「方法は一つ、初心者が命を捨てる気持ちで向かうこと。そして、晴眼に構え肩の力を抜き、柄の握りはゆるくする。次に腰を軽く落とす。呼吸はゆっくり吸い、長く吐く。ところで、私が言うせいがんとは晴れたと鋭い眼光の眼と書く。それは、身体の余分な力を排除し、雑念を去って相対することだ。簡単に言えば呼吸をゆっくりとし、自分の目を相手の目から離さないことだ。小さなことであるが大事だからね」

「はい、分かりました」と言い、同時に胸の中で「なるほど晴眼か」と反芻した。

東彦は「蔭流晴眼討ち」の構えと直ぐに理解した。いつの間にか東彦の視線は先生の顔に張り付いたままであった。「上段者は直ぐに初心者の力を見抜く。見抜けば刀を払ってくるだろう。牽制と圧力だ。しかし、その払いに抵抗してはならぬ。払われるに任せる。相手は再び右から払って

くる。この払いにも無駄な抵抗はせず、払うに任せる。二、

三度この動作が続く。相手の無抵抗を見て、大概の強者はこれで相手を侮るに違いない。そして、ゆっくりと上段に構えるだろう。ここから肝心だ。初心者はこの時振り払われた刀を上段の構えに合わせ、晴眼に戻す。相手はこの瞬間をまっていたのだ。この間延びした動作に、ここが勝機とばかりに一気に刀を振り下ろして来る。この時、絶対に眼を瞑ってならぬ。眼を見開いたまま落とした下半身の腹筋をぐいっと絞り、前に突き出す。その腰の動きに連動して柄の握りも自然に絞られる。絞り込むと刀は必ず前に突き出る。上段から打ち込んで来た体のどこかにその剣は突き刺さるに違いない。うまくすれば喉元だ」

「それで初心者の方はどうなりますか」

「九割り方頭を割られる」

「ということは死ぬことですね」

「そうだ。元より生は望めぬ戦いだ。生を考えたら決して相手を斃せない。斃すという一心を刀に込める。これが『剣身一如』である」

「やはり突きなんですね」

「『突きに勝る先手なし』は、我が流派の祖師の教えでもある」

「相手を斃すには切るより突くのが優位なのでですね。なるほど」

先生は東彦の言葉には応えもせず、自身の言葉を噛み締めるようにしばし眼を閉じた。眼を開くと茶碗を手に取った。そして、それを押し戴くようにして口に運び、茶を含んだ。それを口中で味わうと、音を立てずに飲み込んだ。先生の喉仏が上下に動いた。そこに何か先生とは別な生き物が棲んでいるように東彦には見えた。

わずかに差し込んでいた秋の陽は、すっかりと消えていた。夕刻の冷えた空気が部屋を押し包んでいた。

「突きに勝る先手なしか」

東彦はその言葉を噛み締めながら部屋を辞した。

5

同じ年の五月一日のことである。Y少年の兄は愛国党员としてピラ撒きをしていた。その時彼は他の党员と共に検査された。このことによつて彼は家族にも愛国党员であることが知られることになった。これまでY少年は兄とは政治的な話をしてこなかった。しかし、兄が愛国党员であることを知つて政治的な話をするようになった。このことを

通してお互いの考えが合うことも知るようになったのである。

参議院選挙のさなかの昭和三十四年五月八日、新宿駅前公園で大日本愛国党総裁赤尾敏および浅沼美智雄の街頭演説会が行われていた。それを見かけたY少年は、その演説に聞き入ったのである。その演説の中で赤尾総裁は「若い青年は今すぐ立つて左翼運動と対決しなければならぬ」と熱弁をふるっていた。Y少年はその熱弁に感銘する。彼はすぐに赤尾総裁や党员などに挨拶をし、宣伝カーに乗せてもらったのである。そして、新宿付近を回った。彼は赤尾氏の主義主張に全面的に共鳴するとともに、人物としての総裁に対しても好意を持てるかと判断した。そして、入党を決意したのであった。この決意には兄が党员になったことも微妙に影響していたに違いない。それにしてもその決断の早さには驚く。こういう気質はY少年の特性なのかもしれない。

愛国党の党是は「共産党、資本主義を打倒し、教育勸語を理念として天皇陛下を中心とした福祉国家を建設する。この目的のため現状ではアメリカを利用して共産主義を打倒する」というものであった。一口で言えば「反共愛国」である。

他方、Y少年は「日本は古来より伝統を生かして精神を基礎として物質面も豊かになる。唯心論優先の二元論でいかなければならない。資本主義は一応自由を認めているから現状においては共産主義を第一の敵として、資本主義を利用して倒さなければならぬ」と考えるに至っていた。これは十六歳の少年が独力で打ち立てた政治的主張である。彼は既に右翼としての行動規準を自らの手で確立していたのである。しかもこれは、愛国党の党是とびたりと重なるのである。

崇拜している人物として少年は「天皇は絶対的なもので別になるが、アドルフ・ヒトラー、児島高德、西郷隆盛、山鹿素行、吉田松陰など」を挙げている。全て歴史的な人物である。また、それに加え「大東亜戦争で国のため子孫のため、富や権力を求めず、黙って死んでいった特攻隊の若い青年」も尊敬している、と述べている。いずれも実践家か行動的要素の強い人物である。

この頃から少年の周辺はにわかに忙しくなる。新宿駅前で赤尾総裁の演説を聞いた翌日の九日、浅草公園近くにある愛国党本部に行ったのである。そして、その日は党本部に泊めてもらっている。こうと思ったら直ぐに行動しなれば収まらないY少年の面目躍如と言える。

いった。それだけに総裁の演説にヤジを飛ばす左翼の者を許すことができなかった。「カツとなり、ヤジつた者を引つ張り出してぶん殴ったことも再三あった。また、七月下旬頃には「新橋ステージで安保改定問題についての自民、社会両党の立会演説会があり、改定賛成の幟やビラを持って行って社会党の演説に抗議して、威力業務妨害で」検挙される。さらに八月五日、広島市で原水協主催の「原水爆禁止世界平和大会」に党員数名とで宣伝カーを会場に突っ込ませている。この時も暴力行為、傷害罪で検挙されている。九月には石橋湛山の訪中抗議、また都庁に座り込みをしていた日教組抗議、そして、在日朝鮮人の帰還事業に関わる反対闘争などでも都内および新潟で合わせて三回検挙された。こういった過剰、過激とも言える行動はとどまることを知らず、十二月までに九回も警察に検挙されるほどになっていた。十一月には東京家庭裁判所で保護観察四年に処せられてしまう。しかし、彼はそんなことで怯むことは少しもなかった。むしろますます意気軒昂たる若者になっていった。検挙という事実に対し、Y少年は次のように供述している。

「赤尾先生の指導を信頼いたし、自分も左翼を倒すことは国のためになることと固く信じているから警察に検挙され

翌日、父母からの入党承諾書を得ようと帰宅。父は不在であった。話を聞いた母は強く反対した。せめて高校を卒業してからでも遅くはないだろうと説得するが、それを聞く少年ではなかった。母としては当然の対応であった。しかし、彼の心の中は「差し迫る日本赤化」という危機意識で満ちあふれていた。一日でも一時間でも早く入党し、この日本赤化を企む勢力を打倒し、駆逐しなければならぬという強い信念で凝り固まっていたのである。その日は結局帰宅の遅い父を待たず、再び党本部に行き泊まり込むのである。そして、二、三日後、承諾を得るため再び帰宅する。父親も母親同様「高校卒業してから」というのであったが、少年の熱い情熱と固い意志の前に父親も首を縦に振るほかはなかった。赤尾総裁もやはり「高校を卒業してから」と説得をしたが、少年の決意を変えることはできなかった。

愛国党は六月二日の参院選挙投票日に向けて全勢力を傾けた選挙活動を展開していた。東京地区に赤尾総裁、全国区に参与の浅沼美智雄が立候補していたからである。当然ながら、Y少年も運動に埋没した。運動の主たるものは街頭演説に随行すること、愛国党のビラを街中に貼ることであった。少年は赤尾総裁の演説に心を打たれ、傾倒して

ても全然恥と思っていない」と。

入党して八ヶ月目の十二月頃にはY少年は筋金入りの右翼闘士となっていたのであった。さらに留意しておかねばならないことがある。未だ十六歳の少年が九度も検挙され、保護観察処分されたのである。普通の若者ではとても考えられないことである。警察に一度逮捕されただけで気持ち縮み上がってしまうのが普通であろう。彼の場合は逆に、意気は昂然となり、自らの行動を誇らしげに思うようになっていったのである。しかもY少年はこの経験を通し精神を鍛えられ、多少のことには心が動じないようになったのではないかと推測されるのである。このことは彼の大きな強みとなったのである。そして、彼が大事をなす上で多大な効果をもたらすのであった。

もちろん彼は実践行動のみで日々を過ごしたわけではなかった。彼の理論を深めるために読書にも精を出していた。特に古事記は精読したようで、「内容は非常に文学的で、古代日本の優雅な、しかも大らかな、何も隠すことのない現代日本人にはないようなものである。また、『古事記』に書かれているものはその時代の状況をありありとみせつけるようなもので精神的深みがあり、今まで私が育った環境とは別な世界を見出したような気がして、明る

い気持ちになりました」と絶賛し、その受けた影響の大きさを述べている。

また、『天皇絶対論とその影響』（生長の家会長谷口雅春氏著）も感銘を受けた書の一つとして挙げている。特に「忠」については「忠に私があつてはならない。私がない忠こそ本当の忠である」ということを教えられたと述べている。その他に『日本書紀』、『論語』、『十八史略』、『悪霊』（ドストエフスキー著）などを読んでいた。総じて古典ものを好んでいた。「古典についての理解能力も抜群のものであった。理解する能力というより感応するする精神を持っていた。古^{いにしえ}人の心をそのまま直^{ちよくち}截受容することができた」と沢木耕太郎は彼の著『テロルの決算』の中で賞賛している。また、Y少年が決行直前まで携行し、読んでいたのが『明治天皇御製読本』である。「末とほくかかげさせてむ国のため／命をすてし人のすがたは」などは「暗誦できるほど読み込」んだという。

一九六〇（昭和35）年三月頃から再び安保闘争が燃え上がり、それに春闘や三池炭坑闘争が加わり、その炎は一気に全国に燃え広がった。日本の社会は正に風雲急を告げるというような状況であった。その闘争の一翼を担ったのが全学連であった。これらの闘争に対し右翼も黙ってはいな

かった。Y少年の加盟していた大日本愛国党も「安保改定大賛成」のスローガンを掲げて対峙していった。

一月に岸首相等調印全権団が羽田から渡米することに なった。この渡米を阻止しようとして全学連学生七百人が座り込んだ。Y少年は防共挺身隊とともにこれを排除に行っている。彼はこの状況に対し「一国の総理が日本を代表して出発するに際し、左翼が集団暴力でこれを阻止しようとすることは、国際信用を傷つけ怪しからん」と憤った。それと同時に、「愛国党の運動方法で左翼勢力を阻止できるか」と、疑問を持つようになる。この疑問は運動を続けて行くうちにますます膨らんでいくのであった。しかもこの疑問は、痛烈な批判となって与党である自民党にも向けられる。「重大な日本の危機に派閥争いなどして私利私欲に走り、何ら手を打たない」と。さらに警察に対しても「取り締まりも出来ないだらしない状態」であり、マスコミも「安保反対を輿論のように報じ」怪しからんと批判した。

さらに、「愛国党のような徹底しない運動の方法ではあまり効果がなく、また言論による運動も一つの方法ではあるが、もっと徹底した方法でやらなければいけない」と思うようになるのである。こうして危険な考えが芽を出し、

その考えは次第に煮詰められていったのである。

「自分一人で出来る方法は、国民を扇動して日本赤化に狂奔し罪悪を流している左翼の指導者を倒す以外に他に方法がない」という心境まで行き着くのである。そして、これこそが「我が大義である」と確信するのであった。

その対象者として日教組の小林委員長、日本共産党の最高指導者野坂参三、日本社会党の浅沼稻次郎委員長、自民党河野一郎、自民党石橋湛山、社会党松本治一郎を挙げている。

6

東彦は、まさか桜井先生から高校生活の転機となる機会を与えられるとは夢にも思っていなかった。桜井先生は生徒指導担当（生担）でもあった。生担は生徒会の顧問も務めていた。生徒会の役員の改正は二月に行われる。立候補資格は一年生であった。入学からほぼ一年が経過したとは言え、一年生にはまだまだ生徒会活動には疎いところがあった。結局、現生徒会役員の二年生に助言や指導を仰ぐことが多かった。それだけに二年生の支持、支援がある立候補者が圧倒的に有利であった。

桜井先生は生徒会長立候補者として東彦を二年生役員に推薦したのである。東彦には生徒会長になるなどという気持ちはさらさらなかった。そんな東彦を知っているはずなのに、先生は彼の何を見込んで推薦したのか、東彦には皆目分からなかった。しかし、二年生役員たちが東彦にこの話を持ってきたときには断わるに断りきれなかった。もう話がすっかり出来上がっていたからであった。生徒会長などという成績優秀者というイメージが一般的には付きまとうが、東彦はこのことにも当てはまらなかった。高校では生徒会長よりも応援団長の方が生徒間には名が通っている。いうならば地味な存在であった。従ってよほど物好きでもない限り自分から進んで立候補をする者はいなかった。しかし、このときには対立候補者がいた。従って選挙活動としてポスター制作、各教室を回つての演説などの活動をせざるを得なかった。だが、これらの活動は全て二年生の先輩たちが段取りをつけたり、応援をしてくれた。特に顕著だったのは二年生や三年生たちに対するいわゆる「売り込み」であった。これが完璧に浸透し、東彦は圧倒した。昭和三十一年の早春、二月のことであった。早春というとき聞こえはよいが、みちのく仙台はまだ蔵王おろしが吹き荒び、雪が舞い散る日もあった。特に仙高が立地して

いた北八番町辺りは泉ヶ岳からの風も加わり手足がしびれるような風が吹くこともあった。

しかし、寒風は日本全体にも吹き荒れていた。政治闘争で日本列島は揺れに揺れていた時代であった。これらの政治闘争の渦は高校生さえも巻き込んでいった。

生徒会長になった東彦もこれらの問題に無関心ではいられなかった。何しろ日常接している先生たちの中には勤評や安保問題でデモに参加するなどの阻止活動をしていた人たちもいた。また、生徒の中にも政党の下部組織である青年同盟員の熱心な活動家がいた。彼らは同級生や下級生を機会あるごとにオルグ（支持者にするとか、加盟させる活動）し、彼らの党勢拡大を図ろうとしていた。彼らにすれば生徒会役員などは格好の対象であった。

従来の生徒会活動だけでは物足りず、またどちらかというと血の気の多い東彦は、春が近づくにつれ身体がうずうずしてくるのを抑えようがなかった。三年生を送別し、その後新入生を迎えた東彦たちは、歓迎会などの諸行事も終わった四月半ば、社会科学研究所（社研）部長で青年同盟員の噂さ高い田原から思いがけない話が持ち込まれたのである。

この頃は安保闘争が激しくなっており、新聞、テレビに

副会長の川名が遠慮がちに言った。

「少し勉強不足だね。東京の日比谷高校を知っているだろう。東大への進学者数で全国一位の。その日比谷や有名進学校の駒場高校などの沢山の高校生がデモに参加しているんだよ。しかもだよ、これらの高校生が中心となって『安保阻止高校生会議』までできているんだ。我々はこのような全国の流れに遅れてはいけないんだ」

田原の熱弁はとどまることがなかった。彼の一番の眼目は生徒会が中心になって全校生徒にデモ参加を呼びかけることであつた。しかし、東彦はさすがにそれは受け入れることはできなかった。例えそれを受け入れたとしても顧問の桜井先生が許可するはずがないと思つた。だが、先輩である田原の顔を潰すわけにはいかない。ここは時間を稼ぐ必要があると考へた。

「先輩、話をよく分かりました。生徒会執行部で検討してみます。少し時間をください」

「分かつた。だが、時間はあまりないからな。事態は逼迫している。出来るだけ早く結論を出してくれ。頼むよ」

そういうと田原は笑顔になつた。ニキビが少しばかり目立つその顔は、先ほどの興奮した赤ら顔が嘘のように消え、穏やかで顔の肌色も白くなつていた。そして、またずり落

その記事が毎日掲載され、報道されたりしていた。全国各地で連日デモが行われ、東京では全学連が「暴れ回つてた」ということも知つていた。

四月末、田原が生徒会室に来ていきなり「デモに行こう」と切り出してきたのである。彼は東彦の一年先輩の三年生である。昨年の仙高祭（文化祭）では、とても高校生だけでは用意できない豊富な資料や写真を使つて松川事件（旧国鉄の列車転覆事件）を展示、発表した。「高校生離れの発表」と大きな反響を得た。今年の秋の仙高祭では「安保問題」を提起するともう準備に取りかかつていた。「政府、自民党の国民を無視しての安保条約は許せない。我々高校生もだまつてはいけけない。行動を起こすべしだ」

田原は東彦や数人の生徒会役員を前に熱弁を奮つた。

「高校生が行動を起こすつて一体どういう行動ですか」

「簡潔にいうとデモだ。我々高校生も国民の一人だ。その意思を示すべきだ」

田原は東彦の問いに口を尖らせ、分厚い近視のメガネを押し上げながらまくし立てた。

「しかし、田原さん、高校生がデモしたなんて聞いたことがないですけど」

ちたメガネを右手人差し指でずり上げながら「じゃあよろしくな」と言つて、会室を出て行つた。

まるで突然風が襲い、去つていったような塩梅であつた。皆、田原に気圧され会室は静けさに覆われた。時折互いの顔を見合つた。「どうする」という言葉をなかなか言い出せなかつたのだ。

「どうする」

結局は東彦が口火を切らざるを得なかつた。しかし、互いが納得できるような案などあるはずがなかつた。話し合ひは弾まず結局「会長がまとめる」ということに落ち着いてた。

「桜井先生に迷惑をかけず、しかも田原の顔を立てる方法は学校には知らせず、役員だけ参加する」

これが東彦の妥協案であつた。皆も承知してくれた。

その日は五月一日のメーデーであつた。集会場は県庁前の勾当台公園で、国道4号線を挟んで市役所がある仙台市の官庁街であつた。勾当台公園には樹木も多く、昼休み時刻には県庁の役人、近隣で働くビジネスマンたちでいっぱいである。緑のオアシスの観があつた。この日は公園から溢れるほどの人々であつた。旗が風になびき、プラカードが所狭しと掲げられていた。東彦たちは田原とは市電の

市役所前停留所で待ち合わせていた。これは正解であった。もし公園の中であつたならば、互いを見つけることは容易ではなかつたろう。

東彦たちは総勢五人であつた。待ち合わせ場所です手を振る田原を見て東彦たちはびつくりしてしまつた。何と田原のグループは二十人ほどいたのである。正確には十八人で東彦たちを合わせると二十三人であつた。しかも、田原は用意周到に旗まで持参していた。仙高のスクールカラーは「朱の色」である。元々の意は情熱という。第三者が見たら赤も朱も同じ色である。しかし、どちらかというとならの方が明るく、しかも生き生きしている。もつと言うならば「戦鬨的」に見られる。その「戦鬨色」の旗の中央にでかかどと「仙高」と墨書されていたのである。どう見ても上手とは見えないその字が、逆に高校生っぽいと好評だったのである。東彦たちは驚いてしまつた。しかし、ここまですて来て怖じ気づき退散する訳にもいかない。「仙高生徒会」と書かれていない分「よし」とするとした。

この日の全国各地のメンバー参加者数は「戦後最高の参加者」であつた。「全国九百カ所で六百万人、東京六十万」という大変な盛り上がりようであつたのである。国会前を後進するデモ隊の中に「ハリボテの岸首相の人形」があ

敵よ」

東彦は勇気というよりもどちらかという好奇心が勝つての参加であつた。しかし、そんな説明ができる訳がなかつた。その「素敵よ」という言葉に東彦は気を失うほどであつた。これまで手を繋いだ女性といえは祖母と妹しかいない。それは単なる介添えや世話を目的としたものである。他人で、しかも若い女性というのは全く初めてのことであつた。柔らかな滑らかな感触の皮膚に東彦はこの世のものではないような気がし、心がとろけそうになつていつた。「これって僥倖だな」。僥倖という使い慣れない言葉が初めて身近に感じられた。そしてこの至福の時間がずっと続けばよいな、と切望したほどであつた。片側三車線を目一杯広がつて行進するのは籠から解き放たれた鳥のような気分であつた。生まれて以来最も大きな開放感を東彦は味わたつたのである。しかも話はこれで終わらなかつた。

初めてのデモに興奮したのは東彦だけではなかつた。副会長の川名、書記の齋など参加者五名のほとんどがそうであつた。翌日の放課後の会室では当然ながらこのデモのことで話が盛り上がった。ところが話が熟するにつれ、話題は別なところへ向かつていった。今までの自分たちの無知を脇に置いて「高校生も目覚めなければならぬ。安保改

り、それを見た「警官も微笑する」と報道されている。東彦たちは大人たちの集団の中に埋没して行進を始めた。目的地は仙台駅前である。そこで流れ解散ということであつた。「安保反対」、「岸退陣」、「警職法反対」、

「勤評反対」などをシュプレヒコールしながら行進が行われた。当初、東彦たちはただ列の中で沈黙しているだけであつたが、次第に慣れて来た。すると喜色が顔に浮かび、足取りも軽くなつていった。通常なら自動車の行き来でも歩くことなど出来ない国道48号線を自由に歩けることに快感を持った。そのうちに「フランス式デモに移ります」という言葉が指揮者たちから伝えられて来た。もちろん、東彦たちにはその意味は分かるはずもなかつた。横に並ぶ参加者たちが手を繋ぎ広がつていく様が前の列から次々と伝わって来た。東彦たちはそれに倣つた。そして、隣の人と手を繋いだ。左隣は同じ仙高生、ところが右隣は若い女性であつた。東彦は「手を繋ぐべきか否か」と躊躇してしまつた。しかし、彼女は東彦の気持ちなど付度もせずぐつと手を握つて来たのである。東彦にはそれが握るのでなく絡ませて来た、という感じであつた。途端にぼつと顔が赤らんで来るのが分かつた。

「あなたは仙高生、デモに来るなんて勇気があるわね、素定は日本がアメリカの植民地化になる第一歩だ。絶対に阻止しなければ」と威勢のよい言葉まで出てきた。話している言葉はみな聞きかじりや請売りだつた。しかし、勢いというものは恐ろしい。「この日本の危機に高校生も目覚めねば」がいつのまにか「高校生を目覚めさせねばならない」とボルテージが上がつていったのである。恐いもの無し年齢でもある。「じゃあどうするか」という話になつて、だれかが「討論会やたらどうか」と提案したのだ。東彦はこの「討論会」ということに強く引きつけられた。「それおもしろいんじゃない。安保問題の討論会なんて市内の高校生はおそらくだれも考えていないんじゃない。やろうよ」

話は思いがけない結末を迎えようとしていた。「でもさ、校内での討論会ってあんまりおもしろくないんじゃない。顔見知りばかりで、意見があまりでなく、討論会が成立しないんじゃない」

「じゃあ川名君、どんな案があるの」
東彦は内心、川名の案に興味を持ちながら問い返した。川名は一年生ではあつたが一浪していたので東彦と同年齢であつた。

しかし、川名はそこで沈黙してしまつた。その先までの

案は彼も持っていないかったのだ。他の者たちも同様であった。

「討ち入りってあるじゃない。おれ歴史が好きで、今、幕末ものを読んでるんだけど、寺田屋に新撰組が討ち入った話。他の高校に安保問題で討ち入りをするのってどうかな」

それまで聞き役に回っていた齋が話し出した。皆一斉に齋に注目した。

「それあり」

最初に賛意を表したのは川名であった。それに続いてみなが「賛成、賛成」と叫んだ。

「討ち入りという言葉はちよつと過激過ぎるし、不適切だよ。どちらかというと果たし合いという表現が合っているんじゃない。でもこれも挑戦的で刺激が強すぎるね。もう少し柔らかない表現はないかねえ」

もう一人の副会長の中尾がゆつたりとした口調で言った。中尾は東彦と同年である。割と慎重な性格で、物事を理詰めで考えるタイプであった。彼の言葉でヒートアップした雰囲気が少し落ち着いていた。

「中尾君の言うとおりだ。齋くんの提案は素晴らしいと思うよ。しかし、受け取る相手側の心情を考える必要がある

よね」

東彦の話にみなも納得した。

齋が東彦の言葉を受けて言葉を継いだ。「ちよつと話を整理しようよ。まず討論会を行う。これはいいね。討論の相手は市内の高校。内容は安保の改定について。大体今の段階ではこの程度かな」

「さすが齋くん。冴えているね。そうすると後は討論会の名称だね」

東彦の言葉にみんなが頷いた。

「もう一つ大事なことがありますよ」

齋の言葉に皆は虚を突かれたように彼を見た。

「日にちですよ」

皆は齋の言葉に大きく頷いた。

「討ち入りや果たし合いはどちらも過激でまずいね。そうすると高校生討論会ぐらいの落ち着いた名称にしますか。」

それに開催日は一ヶ月位は置いて六月末の土曜日かどうか」

齋の提案にみな異論はなかった。

「心情的には果たし合いだけ相手の気持ちや高校生という立場も考え、名称は穏便にしますか。『安保改定問題を考える高校生討論会』でどうですか。それと、開催日は相

手校の都合を聞いて決定しましょう」

東彦は会長としてまとめた。

その後、具体的な話し合いに入った。

討論の相手校は仙台一高と仙台二高とする。全て男子校である。名前の通り当時、進学率では一高が県内一位、二番目が二高でいずれも宮城県内の名門校として名が通っていた。仙高は三番目であった。案としては女子校も上がったが、最初はおもしろ半分で話が盛り上がったが、無理なことは誰しも分かっていたので正式案では採用されなかった。そして、開催曜日はやはり土曜日の放課後と決めた。

この時間帯ならば授業に差し支えないからであった。ここで驚くのは、事前に担当の桜井先生に相談はなかったことである。だれもそのことは疑問に思わなかった。先生が反対するなどということは少しも念頭になかったのである。十月に開催する仙高祭で、実行委員のメンバーの数が学校に泊まり込むことになったときも同じであった。何のクレームもなく許可してくれたのである。仙台高校の校是には「自主、自立」とある。これが単なるお飾りではなく、それを学校、先生たちが生徒たちに保障してくれていたのである。信用されていると思うと、例えヤンチャな

高校生といえども自制心が働く。東彦たちも同じであった。

東彦には七十半ば過ぎた今も忘れられないこの当時の教頭である安住先生の言葉がある。それは「ジェントルマンたれ」という言葉である。先生は折につけその言葉を話してくれた。安住先生は英語科の先生であった。東彦も先生の授業を受けた。その時、先生はテキストとしてケネディ著の「勇氣ある人々」の英語版を使って授業をされた。当時は難しただけで内容の理解は全く不十分であった。しかし、年齢、経験を重ねるにつれ、安住先生の教育者としての志の高さと情熱の深さを感じるのである。

この「果たし合い討論会」は仙台二高からは体よく断られた。しかし、一高からは受けて立つというニュアンスの返事をもらったのである。「仙高生に少し教えてやろう」ぐらいの気持ちがあったのかもしれない。

当日は、この討論会の目新しさもあってか体育館は一高生で一杯であった。議論は白熱という訳にはいかなかったが、付け焼き刃の知識ながら東彦たちはそれほどのポロもださず、緊張と胸の高まりの裡に終わったのである。

会場はやはり騒然としていた。舞台では浅沼委員長が演

説をしており、その舞台には愛国党の黨員の男がピラを撒いていた。そのピラが舞台の上空をヒラヒラと舞い、床には落ちたピラが散乱していた。会場二階でもやはり愛国党員の男がピラを撒いていた。舞台の、そして二階の男たちは直ぐに私服刑事に捕まえられた。舞台に向かって左側の客席には右翼と思われる一団が座っており激しいヤジを飛ばしていた。また、右側の座席には左翼らしいグループが座っていてやはり大声でヤジり返していた。

会場から見ての中央右寄りに池田総理、そして、その隣りに吉田都選管委員長が椅子に座っていた。また、演壇の左側の司会者席には司会の小林氏他二名ほど座っていた。小林氏は立っていたが、その顔は困惑と苦しい表情に満ちていた。

演壇の後方一メートルぐらいのところに生花があった。台と花瓶と生花を合わせると優に二メートルは超えていた。立派な台に、人ひとりでは抱えきれないような花瓶、その花瓶には山盛りの生花、それは、騒然とし、混乱を極め、殺気だっている空間に超然とした「ひとり静か」な風情を醸し出していた。

Y少年は首を巡らしそれらをゆつくりと確認していった。そして、一番右端の通路に移動した。左腰に隠した短刀が上がる時、瞬間的に『やめようか』という考えが脳裏を走った。が、『やるんだ』とすぐに打ち消して走ったのである。

Y少年が舞台上上がった瞬間まで、警備陣は彼の行動には注目していなかった。そこに一瞬の空白が生じていたのである。浅沼委員長担当の警備の刑事は少し前に舞台上でピラを撒いた男を拘束し、連行して所定の場所にいなかった。また、舞台上上がった少年を目にした警備陣たちは「またピラ撒き」かとそれほど重視していなかった。さらに多くの警備の者たちは舞台から見ての客席右で猛烈なヤジ、怒号を飛ばしている右翼のグループにその視線が引きつけられていた。

Y少年は限界まで引つ張られたゴムが手元に戻る勢いで、真一直線に浅沼委員長の巨体めがけて疾走していった。距離にして十メートルほど、時間にしてほんの二、三秒であろう。彼が浅沼委員長を突き刺し、池田総理の足下近くで床に押しつけられるまではわずか十三秒ほどである。その間に彼は委員長を二度刺し、さらにもう一度突き刺そうと身構えてもいるのである。まさに疾風迅雷の早業であった。Y少年が舞台上駆け上がる時「やめようか」と脳裏に浮かんだのはなぜなのであるか。両親、なかなんぞく母を

少し歩行の障害になるのがやはり気になった。

この時、司会の小林氏は会場の騒然たる状況を一旦沈静化させるため浅沼委員長に何か言葉をかけていた。「演説の中断」の了解を得るための言葉であった。そして小林氏は会場に向けて「静粛にするよう」話した。その言葉で会場はやや静まったのを見た小林氏はマイクで再開のアナウンスをし、そして「それではお待ちいたしました。どうぞ」と委員長に伝えたのである。委員長は右手に持ったハンカチで額の流れる汗を拭きながら演説を再開した。

Y少年は、会場からの「演説中止」や「時間だ」というヤジと司会者が浅沼委員長へ何か話しかけてたことを見聞きし、委員長の「演説終了時刻が迫っている」と焦り、決行を急ぐ気持ちを強めたのである。

会場から舞台上上がる常設の階段は取り外されていた。「早く決行しなければチャンスはない」とはやる少年は、舞台上に上る地点を探すべく必死に眼を凝らした。その必死さに応えるように少年がしゃがんでいた通路の突き当たりの舞台上にニュース映画社の機材を入れるための黒い箱が置いてあったのだ。「天佑」とY少年が思ったかもしれない。彼は迷わずこれを踏台に高さ一・五メートルの舞台上飛び上がった。そして、委員長目がけて突進した。「舞台上に駆け

思つてなのか、はたまた主義に殉じたとしても人を殺める理不尽さを感じたことなのか、今となってはあの世のY少年に尋ねるべくもない。だが、この「躊躇」にわずかに心が救われる思いはするのである。

Y少年が舞台上駆け上がったところは狭く、そこに二台のテレビカメラがあり、「その右側か左側か中央を走り抜いたかは覚えて」ないと少年は供述している。しかし、聴衆のひとりには「テレビカメラの後ろ側」を駆ける少年の姿を見ていた。彼は舞台上駆け上がるや否や脱兎のごとく演説中の浅沼委員長めがけて突進していった。

彼は「テレビカメラのところを一メートル位走り抜けたときに刀を抜き、右手で柄を握り、左手の親指を下にして掌で柄の頭を押さえ腹の前に刀を水平に構え」という、完璧な刺殺の態勢だった。

この時、彼は刃だけ抜いたのか、あるいは鞘ごと抜き取り、その刃だけを手に残して鞘は捨てたのか、これは定かではない。しかし、鞘が左腰に残っていれば走るのに、また、この後の刺殺や乱闘とも言える動きの妨げになる。さらに当日の毎日新聞夕刊一面を飾った少年の身構えた姿には鞘が見えない。これらのことから、やはり鞘ごと抜き、そして即座に、鞘を投げ捨てたのではないかと思われる。

彼は二台のテレビカメラのどこを走り抜けたか、また刀をどの辺で抜いたかは覚えてはいない。しかし、殺戮用武器の刀の握り方、構えは詳細に記憶している。刀は全長48センチ、刃渡り34センチ、柄の長さ14センチである。柄を両手で握れば手に余る。もしくは刃の根元部分を握ってしまうことになり、手を傷つけてしまう。Y少年の握り方が最も適切で且つ刀の機能を最もよく發揮するのである。彼がこの短刀を使って突き刺す訓練を実際にやったかは不明である。どちらかというやっつけていない可能性が高い。なぜならば短刀の発見の日から事件当日午後二時ごろまでそれは父母の居間押し入れにあつたからである。また、詳細に供述している調書には訓練したことは記述されていない。では、それまでは武道の経験があつたのだろうか。「ふだん剣道を習っていた」と夕刊（十一月三日付毎日新聞）にはあるが、このことに言及した他の記事はない。これも定かではない。本人自身が武道の訓練をしたようなことは述べていない。やはりしていなかったというのが事実だろう。ただ、六月頃、「防共挺身隊の隊員たちが多摩川の河原で、腕試しをしたことがあつた。日本刀で藁竹を一刀両断することができるかどうか腕を競つたのだ」とつた。日本刀での藁竹斬りは意外と難しい。というより初心者にはとても無理である。

彼の行動がますます過激になり、「凶暴になつていく」のも必然であつたのである。こうして彼は「昭和三十四年五月からの半年間に、十回以上も検挙され釈放されまた検挙される」ことをたび重ねた。彼はこれらの活動や闘争を重ねる毎に胆力を培つていったのではないかと推測するのである。

彼は決行に至る前の十月一日、四日、五日、七日の四回明治神宮に行つてゐる。一日は日本刀を自宅で発見した日である。彼は明治神宮へ行き、左翼の指導者の殺害を決定している。しかし、標的を浅沼委員長に絞つたわけではない。七日、この日は刺殺の第一目標として日教組の小林委員長を挙げ、第二として共産党最高指導者野坂参三、そして、社会党委員長浅沼稻次郎を第三目標として挙げた。さらにこの時彼は殺害方法、すなわち日本刀で刺し殺すという方法についても考えたと述べている。

「相手の心臓を狙つて刺せば一番よいが、狙にくいから昔の日本人が切腹して死んだように腹を刺せば殺せる。しかし私は力も体力もないから刺そうとすれば体をかわされると失敗するので自分の腹に刀の柄の頭をつけて、刀を水平に構えて走つた勢いで目標に体当たりすれば、必ず相手の腹を刺すことができる」と。

大概は刀が撥ね返されてしまつて斬るどころの騒ぎではない。下手をすると手首を傷付けてしまう。大事なのは切り込む刀の角度と力の入れ処と絞り処、そして、腰の使い方である。一朝一夕には修得することは難しい。案の定、隊員の多くは刀を撥ね返されてしまった。ところがY少年は「刀を構えると、鋭い気合いと共に真二つに切り落とした」という。尋常なことではない。彼は時に応じて精神を集中できる稀有な資質・天稟を持つていたのかもしれない。脳内で想定したことを繰り返すシミュレーションはどうかという、これは現実性が高い。その気になれば場所を選ばずいくらでも試すことができるからである。だが、やはりこのことについても少年は触れてはいない。

心の問題、精神力もある。胆力と置き換えてもよい。いくら技術を習得しても「物事に恐れず、臆せず、驚かない気力」、即ち胆力なくして成就し得ない。そのことについては得心が行くことがある。彼は安保改定反対の集会やデモに対し殴り込んだり、抗議したりしていた。あるときには「行進中の反安保のデモ隊に、たつたひとりで突つ込む」といったこともあつた。「たつたひとりで突つ込む」ということは非常に恐怖を伴うことである。並の決断だけでは出来得ないことである。それを少年はやりきつてしまつた。

しかし、理屈が分かつても実行出来るかどうかは別問題である。しかも人の命を奪うことに関わることである。平常心をもって事に当たることは至難と言える。しかし、修羅場を幾度もくぐり抜けて来た者ならば心の動揺などは少なく、冷静に事に当たることができるだろう。だが、常人ではそうもいくまい。まして十七歳の少年である。ところが少年は理屈通りのことを完璧に実行してしまつたのである。

第三目標の浅沼委員長が結局第一候補・本命になつてしまつたのは偶然とも言える。委員長からすれば不運ということだった。

十二日、朝起きて配達された読売新聞を見たところ、「今日の欄」に午後二時から日比谷公会堂で「自民党、社会党、民社党三党首立会演説会」があることが書かれていたのである。彼は迷いに迷い、決断する。第一目標の野坂参三を捨て、「浅沼委員長を殺す」と。

靴音も高くまっしぐらに全速力で駆けて行つた少年の両の手は短刀をしっかりと握つていた。その異変に浅沼委員長は首をやや左に向け、いぶかしげな視線を少年に向けた。少年はもう演台の左下の角を跳び越える寸前であつた。委員長はそれを防ごうとでもしたのだろう。胸の辺りまで上

げていた左手を開き少年を防ぐ仕草をした。しかし、水平に構えられた短刀は委員長のその曲げた肘の真下を通過し、少年の全エネルギーが込められた刃は委員長の脇腹に真っ直ぐに突き刺さった。委員長はその刃を避けることもなく、まともに受けてしまったのであった。不思議なことかもしれないが、少年の渾身の力と全霊が込められたその赤黒く錆びた刃は、一瞬白く輝いたように見えた。そして、少年の全身は怒濤のように委員長の左半身に激突。その激烈な勢いのままに少年の顔面は、避けることもなく委員長左の左肩に真正面からぶつかつた。少年の顔は衝撃で左横向きにひし曲げられ、メガネは額まで撥ね上がり、そして飛んでいった。カーキ色のジャンパーの裾も舞い上がり、左ポケットから白いものが飛び出しそうであった。ポケットには教科書と大学ノート二冊が入っていたのだ。舞台上の演説草稿も二、三枚空中に舞い上がった。

少年の勢いをそのまま呑んだ刃は根元まで深々と刺し込まれた。少年は無言のままであった。時計は午後三時四十分三十九秒を指していた。

委員長の胸の前の開いた左手は、親指と人差し指の先をくつつけ楕円形の輪を作っていた。その輪は「和」を意味していたのであろうか。または「話せば分かる」とでもい

見えた」と述べている。呆れるほどの冷静さである。このような修羅場でこれほどの冷静を保持し得る十七歳人は、はたしてこの国でいく人ほどいるであろうか。

この時、少年を追う警備陣の幾人かがようや彼をつかむ距離まで近づいていた。しかし、遅すぎた。

身長一七六センチ、体重一一六キログラムの巨軀は激突をともに受け、横を向いてしまった。上げていた左手は下がり脇腹を抑えているように見えた。そのままタ、タと横へ二、三步ほど動き、警備の者たちも舞台左右前後から殺到してきた。少年は後ろから追いついてきた警備の三、四名と揉み合いながらもすると抜け、短刀を右手に持ち替えていた。委員長の背後に回った時、勢いで委員長の身体がさらに右へ回転した。結果的にそのことが少年の前に委員長の横半身を晒すこととなった。少年は右斜め前から短刀を突いた。その刃は委員長の左胸辺りを切り裂いた。後に委員長のYシャツの左胸ポケットの真ん中、そして背広上衣肩下である腕上衣部を横一線に切り裂かれていることが判明している。Yシャツの胸ポケット辺りは血に染まっていた。

しかし、少年は切つ先が狂い左胸に浅く刺さったに過ぎず「殺すまでに至っていない」と判断したのだ。と同時に、殺到して来た私服刑事たちが少年を取り囲み、抑え

うサインだったのだろうか。委員長の目は強く閉じられ、半開きの口の歯も固く食い縛られていた。右手の汗を拭っていた白いハンカチも強く握られていた。突然体内に刺し込まれた凶器、刃の痛みを堪えているように。

「・・・都合の悪い政策は全部捨てておいて、選挙で多数を占めると」

これが浅沼委員長演説の最後のことばであり、生前における最後の肉声となった。この最後の言葉に続くのは、「どんな無茶なことでも国会の多数にものをいわせて押し通すというのでは、いったい何のために選挙をやり、何のために国会があるのか、わかりません。これでは多数派の政党がみずから議会政治の墓穴を掘ることになります」であった。

会場の二五〇〇人の聴衆は一瞬息を飲んだ。しかし、次には怒号、叫び、悲鳴が会場に満ちた。舞台には何十人も警備員、そしてカメラを掲げた報道陣がY少年めがけて殺到した。

少年が刃を刺し込んだ時、彼の身体は委員長に密着、委員長と少年の体に挟まれた刃を持つ左手肘はくの字に曲がり、右手は柄から離れていた。少年は左手で刃を抜いた。この時、彼は「刀の先十センチ位に血がついていたように

つけようとしたり。その背後を委員長は腰を落とし、ヨタヨタと力なく歩を進めていた。そして、仰ぐようにして右舞台袖の方に向いた。少年を抑え込もうとしていた集団は団子状態になって司会者席方向へ移動し、委員長と交錯した。この時、少年を抑え込もうとした刑事たちの塊がほぐれ、この一瞬の間を逃すことなく少年は三度目の刃を委員長に向け、刺した。これは空を切つたようであった。少年は刃を引くや四度目の攻撃に移ろうと身構えた。この「引く運動」は次の運動である「突く運動」、前へ動こうとする運動を内包している。いわゆる「作用と反作用」である。

少年は再び柄を両手で覆うように握つた。右手掌で柄の頭を押さえ、左手の親指を下にし、腹の前で水平に身構え、目は委員長の腹部を凝視していた。ジャンパーの裾から垂れて見える紐状のものは学生服の上から短刀を固めに押さえつけたバンドかもしれない。右足にやや重心を置き、左足は少し浮き、今まさに刺殺に移ろうという瞬間であった。これ以上ないと思える完璧な攻撃態勢である。

この瞬間を撮影したのは毎日新聞社カメラマン長尾靖であった。後に彼はこの写真により日本人初のピューリッツァー賞を受賞している。彼の写した写真にはY少年の真後ろから少年を取り押さえようとする私服刑事の輪郭がかかる

うじて見える。その足元にかすかに眼鏡が認められる。少年の眼鏡に違いない。彼が演台の後ろで委員長を体当たりしながら突き刺した時に飛んだ眼鏡だろう。その演台から二、三歩は離れていると思われる。混乱の極みの中で傷つけられ、だれにも踏みつぶされることもなくこの距離を無事に移動したのは奇跡のように思われる。また、強運を持つているようでもある。

浅沼委員長は身構えるY少年に対峙した。鼻の下あたりまでずり落ちた眼鏡、目は見開かれ、口は真一文字に食い縛られていた。それは突然の理不尽さへの驚き、不埒さへの怒りを表明しているようでもあった。前に突き出された右手にはハンカチが握られており、その白さが無念さを表しているようであった。左手の拳は心臓辺りを庇い、生への執念にも見てとれる。無念の極みと言えよう。委員長のシルバーグレー色のズボンの太もも辺りがひと際黒く写っている。濡れているようにも見える。出血によるものなのだろうか。

少年のこの攻撃の態勢は瞬きの間で、肉眼では容易に確かめること、また追うことは難しい。この時は警備陣が周囲を完全に包囲しており、あたかも投網を打つかのよう少年に襲いかかっていった。二十人とも三十人とも思え

到着したのは午後三時十分ごろであった。しかし、遅かった。

午後三時四十五分、日比谷病院の三河内副院長から死因の説明がなされた。

「病院に運ばれた浅沼氏はすでに四肢末端にチアノーゼがあり、左前胸部に切創、側胸部に刺創があった。心音聴取もできず自力呼吸はなく、ただちに人工呼吸をほどこし各種強心剤をうったが、すでに心臓も止まり、再び自力呼吸も行わなかったため、浅沼氏は病院に到着したとき、すでに死亡していたものと診断する」と。

時に浅沼委員長、齢六十一歳と九カ月であった。政治家としてまさに円熟期を迎え、なすべき課題も山積し、しかもそれに果敢に挑戦していた最中であった。

東彦たちは仙高祭開催に向け、ひとつ大きな課題を抱えていた。展示用のパネルである。二十周年記念ということでは展示希望の部や同好会などの数が例年の一・五倍ほどあったのである。しかも、貸出をしてくれる予定だった教育委員会が都合がつかなくなってしまう。これはかなり

る数であった。少年を真ん中に人の塊は今度は反対方向、舞台に向かって右方向に雪崩を打つように移動した。そして、池田総理が着席している前に少年は組み敷かれた。その瞬間まで少年の右手は短刀を握り続けていた。彼の執念がそうさせたに違いない。最初の突き刺しからわずかに三秒後のことであった。

浅沼委員長は、舞台の奥へ向かって両足を外にくの字に曲げながらよろよろと歩んでいた。腰は落ち、両の手は下がり、顎は上がり、今にも崩れ落ちそうであった。身体の筋肉を統率する司令塔、神経支配が崩壊していたのである。実際、駆け寄った人々の輪の中で委員長は床に倒れこんでしまうのである。「人間機関車」として民衆に愛され、「庶民的な政治家」、「演説百姓よ」として慕われ、二間のアパートに住み続けた清貧の政治家の最後の舞台が、演説途中の舞台上であった。以て瞑すべしというべきか。

演台の横の生花は、この混乱の中でわずかに揺れることはあっても倒れることはなかった。何十人もの人々が右往左往し、揉み合うことがあったにも関わらずである。そして、この生花は舞台上の惨劇を一部始終余すところなく見ていたのである。

浅沼委員長は直ちにパトカーに乗せられ、日比谷病院に

前に連絡があったので市の公民館に依頼をし、何とか借用のめどがついていた。問題は運送であった。例年だと教育委員会の方で運搬も引き受けてくれ、費用はかからなかったが、公民館の場合はそうはいかなかった。貸し出しは無料としても運搬の費用は学校持ちという条件になっていた。学校教育課と社会教育課の管轄の違いがこんなところに現れていた。この運送費については例年無料であったため予算に計上していなかったのである。公民館から借用できるということが分かった時点でこのパネルの運搬費については確認をとっておくべきであったのだが、例年無料ということが念頭にあったためこの費用については確認を怠っていたのである。それが分かったのが十月に入ってからであった。もちろん、実行委員会でこのことは検討し、桜井先生にも相談をした。学校の方も急なことですぐに予算を援用し充当することは難しいということ、延ばし延ばしになっていたのである。結局、開催直前の十二日まで来てしまったのである。問題は運送とその費用の捻出である。放課後、実行委員六名が生徒会室に集まり話し合いをした。皆浮かない表情である。それも当然であった。事はお金にまつわる話である。解決案などそう簡単に出るはずもなかった。いたずらに時間が経つばかりであった。どうにも

ならぬ状況を見た東彦は、桜井先生に相談することを提案した。だれも否とは言わなかった。東彦は副会長の中尾と二人で美術室に向かった。桜井先生は帰宅の用意をしているところで、寸でのところで会えずじまいになるところであった。

「そのことは私も心配していてね、卒業生や知り合いに連絡を取ってみたんだがねえ」

先生にはあまり切迫感がなかった。

「もう時間がなくて困っているんです」

東彦は思わず哀願調になってしまった。

「もう少し早くに対応すべきであったねえ」

何ともよそ事のような話しぶりである。

東彦はイライラしてきた。それを見越したかのように、「今更そんなことを言うのは無責任だけだね。ところで運搬の日はいったったかね」

取りなすように言ってきた。

「運搬は金曜日の午後です。今日は水曜日ですから明後日になります」

「そうか、明後日か。時間がねえ」

先生もどうやら事態が切迫していることが分かったようであった。

市内の各高等学校には校内掲示用のポスターを二枚送ってある。それとは別に、各学校の近くや市内の要所の電柱や塀にポスターの掲示をしていた。掲示の漏れや剥がれや破損がないかなどの点検を二日前の月曜日から行っていた。この日はその最終日であった。それぞれ手分けして行くことになっていった。これはポスター貼り同様難儀なことであった。市内の各高校は必ずしも交通の便の良い所にあるとは限らない。また、自転車で行くには無理な所もあった。そういう所は徒歩で行くほかはない。そんなわけで点検作業はかなりきつかった。ただし、一度ポスター貼りで行っているところなので迷うことなくその場所に直行出来た。

幸い叔父には直ぐに連絡がついた。ところが叔父は会社まで来て説明してくれというのであった。叔父の会社は東彦の自宅から徒歩三十分ぐらいの所にある。市電の南方面の終点である長町駅からは七、八分である。学校からは一時間もあれば着く。しかし、ポスター点検作業から東彦が欠けることになる。開催期日が目前に迫り、その他の準備作業も山積している中で、例えひとりでも欠けるのは厳しかった。しかし、止むを得なかった。実行委員たちに事情を話すと皆気持ちよく了解してくれた。

「ところで君たちのお父さんとか親戚とかで運送関係の仕事をしている人はいないかね」

東彦はそれを聞いてはっとした。母方の叔父が運送業をしていたのだ。正確にはトラックの修理と運送業である。

母とは仲がよく東彦の自宅にはしょっちゅう訪ねてきた。

当時では珍しいアメリカ製の乗車車であるものだから、来ると近所の子どもたちが直ぐに寄って来、珍しそうに車を眺めていた。修理業が中心であったので東彦は運送業のことを失念していた。

「実は叔父が運送業をしています」

「なんだ、灯台下暗しじゃないか。その叔父さんに何とか頼めないかねえ」

「実は叔父が運送業をしています」

「なんだ、灯台下暗しじゃないか。その叔父さんに何とか頼めないかねえ」

桜井先生の言う通りであった。今まで話し合ったこと、悩んだことが無駄であったのだ。東彦は自らの不明に恥じ入った。

「直ぐ叔父に連絡してみます」

「そうしてくれると私も安心だね。それじゃあ職員室へ一緒に行こうか」

桜井先生は安堵の顔で東彦を促した。同行してきた中尾の表情にも笑顔が溢れていた。

この日は仙高祭ポスター掲示の最終確認日でもあった。

叔父の事業は軌道に乗っていて会社の景気は良かった。叔父の所には四時半頃着いた。搬出先の公民館と搬入先の仙台高校の場所、それにおおよその搬入時刻を確認した。料金については事情を話し、なんとく無料にとお願いしたが、それはさすがに無理であった。それでもなんとか半額にはしてくれた。叔父はラーメンの出前を頼んでおいてくれた。他の高校生同様、東彦もラーメンは大好物であった。と言っても高校生の身では滅多には口にはできなかった。たまの放課後に同級生たちと連れだつて地元老舗デパート藤崎近くの「ちようちん屋」とか鶏ガラの透明スープで人気の市役所近くの「南蛮ラーメン屋」に行くのが最大の楽しみであった。丁度話が終わった時にラーメンが届いた。

長町駅前の「橋本屋」のラーメンであった。中学校三年時の同級生の父親が経営していた。東彦の母が最良にしているラーメン屋でもある。幼い時からの馴染みなのでラーメンというところの橋本屋の醤油味が自然に口の中に広がる。東彦の顔に笑みがこぼれた。進められるままにラーメンの蓋を取り汁を啜った。「これだ、この味だ」と心の中でつぶやいた。汁の味と暖かさが胃の腑から体全体に広がっていった。そして、汁の味がからまった麺をスルスルと飲み込んだ。「ふう」という満ち足りた吐息が思わず出てし

まった。

「うまいか」

「はい、すごくうまいです。ありがとうございます」

「それはよかった」

叔父は満足そうにうなずき、笑みを浮かべていた。

東彦の心はうれしきで一杯になった。味を噛み締めながらラーメンを啜った。叔父の配慮にただただ感謝するばかりであった。しかし、一方でポスター掲示の確認などで歩き回っている実行委員たちに済まなくも思った。あつという間の時間であった。その後、事務員の春代さんがお茶を出してくれた。そのお茶を飲み終えてようやく部屋の周りに目をやることができた。工場の前の国道4号線を行き交う車のライトがもう点灯されていることに気付いた。

「早く学校に戻らねば」と思った。

帰り際に叔父が、

「少しだけ何かの足しにしなさい」

そう言うて封筒を渡してくれた。東彦は瞬間的にお金だと理解した。涙があふれてきた。東彦は叔父の前にもかかわらず拳で涙をぬぐった。感極まって言葉も出なかったのだろう。ただ幾度も幾度も頭を下げた叔父の会社を辞めた。学校に戻る途中の電車の中で、もらった袋の封を開いた。

五百円札一枚が入っていた。恐らく叔父は母に連絡をし、学校に泊まりながら文化祭の準備に没頭していることを聞いたのである。そのことについては叔父は何も言わなかったが氣遣っていたに違いない。東彦の心に叔父の優しさが沁みていった。東彦は叔父のことを思った。東彦が初めて映画を見たのは四、五歳のころであったが、連れていってくれたのはこの叔父であった。また、必ずお年玉をくれた。叔父については良い思い出ばかりである。東彦は久しぶりに明るい気持ちになった。大病院前で降りるとパン屋を探し、もらったお金でコッペパン、クリームパン、ジャムパンをそれぞれ十個ずつ、残金で駄菓子を買えるだけ買った。店のパン総買い同然であった。店の女主人は「こんなに沢山どうするの」と驚いていた。東彦は「ちよつと」言い、笑顔で「どうも」と応えて店を出た。メンバーの喜ぶ顔が浮かんだ。陽はもうすっかり沈んでいたが、西の方角の山稜が自らを誇るかの様に濃いブルーに染まり、山並みは黒々と際だっていた。

六時をちよつと過ぎた頃にもかかわらず、生徒会室には手伝いの四人を加えた九人が待っていた。開いていたドアに入るとみんなの視線は東彦が両手に持つ紙袋に集まっていた。しかし、「どうだった」と、副会長の中尾が直ぐに

聞いて来た。

「お陰でうまくいったよ。しかし、問題があるんだ」

「問題ってなんですか」

川口が心配そうに尋ねた。

「実は運搬料がかかるんだよ。半額にしてくれたけど」

「半額なら何とかなるんじゃないですか。明日桜井先生に相談しましょう。きつとうまい解決方法を考え出してくださいよ」

「だいじようぶ」という声がみんなから出た。東彦も気持ちも軽くなってきた。そして、持っていた紙袋をどさりと部屋の中央にある机の上に置いた。「叔父からだよ。みんなで食べてって。差し入れ」

東彦のその声を待っていたかのようにみんなの手が伸びてきた。

「待てよ、みんな」

と言いながら中尾は袋を開け、中のパンを机の上に広げた。「わー」という歓声が上がった。中尾がまた、口を出し、「平等にわけようぜ」と言った。

「コッペパン、ジャムパン、クリームパンがそれぞれ十個ずつあるからちよつとひとりとつずつになるね」

「今日全部食べないで明日の分も取っておきましょう。今

日は好きなものを一人二個食べ後は明日のおやつに残すということですか」

東彦の説明に中尾は大岡裁きのごとくうまい判断を下した。皆も文句などありようもなかった。

夕餉にしては貧しいものであったが、皆はパンを口に頬張って楽しげであった。全員でこんな風に会話し、楽しげに過ごすのは初めてであった。この様子を見ながら東彦の胸は少しばかり痛くなった。思わず手で口の周りを拭いた。もちろん、もはやラーメンの匂いなどするはずもなかったが。

「会長の叔父さんっていい人ですね。まるでおれたちの空腹を見通していたみたいですね」

川口の声に「そうだ、そうだ」という同感の聲が上がった。東彦も芯からそう思った。同時にこんな叔父を持ったことを誇らしげに思った。

「腹の皮つっぱれば目の皮ゆるむ」のことわざとおりで東彦の体温は上がり、体全体が弛緩し同時に睡魔が襲って来た。他の者も同様で急に口数が少なくなってきた。

時計を見ると七時ちよつと前であった。

「もう七時だよ。帰宅組はそろそろ帰らないといけないな。とにかく今日はここまでと言うことで解散しよう」

東彦の言葉を合図に手伝い組を含めたメンバーの半分が立ち上がって片付けを始めた。そして、直に「お疲れさん」とか「また明日」とか言いながら生徒会室を出た。

「おれは彼らを送りながら宿直の先生に挨拶をしてくるから」

東彦はそう言うのと帰宅組の後を追った。そして、一階の管理棟の玄関で彼らを見送った。職員室にはまだ明かりが点いていた。東彦は今日の宿泊者を報告するために職員室のドアを開いた。奥の窓際に近い席に国語担当の早川先生が新聞を広げて読んでいた。

「早川先生」

と、声を掛けると、

「おつ、東彦か。今日も泊まりか。ご苦労さん」

先生は読んでいた新聞を畳みながら東彦の方に体をねじりながら話しかけて来た。

早川先生は現代国語の担当で、東彦は先生の授業を受けていた。先生は時折、Y談めいた話などもする気さくで明るい人柄であった。

「今日の泊り組の名簿です」

東彦の報告が終わらないうちに、

「おい、東京の日比谷公会堂で大変なことが起こってし

ている。

しかし、と東彦は不思議に思った。「なぜ委員長のメガネは鼻の下までずり落ちてきているのだろうか」と。そして、既にもう何か大きな力が委員長に加えられてしまっていたのか、と思った。

「あつ」と、東彦は今度は小さく声を出した。

「これはまさに伊東先生の言う『剣身一如』を体現した構えなのではないかと思ったのである。「いや、絶対にそうだ」確信した。彼は「プロの殺し屋」なのかと一瞬思った。しかし、その風貌はいかにも若い。早川先生の言う十七歳というのは本当だと思った。新聞にも「犯人は十七才」と出ている。しかし、日本には十代の殺し屋などいるはずがない。だが、その足の配り、腰構えと握った凶器の位置、目の配りはとても素人には見えない。このような構えは一朝一夕に身に付けられるものではない。厳しい修練を経るか、もしくは幾たびかの修羅場をくぐって初めて身につくものであるはずだ。

いずれにしてもこの男は手練れの者に違いないと東彦は確信した。そして、この半月ほど休んでいる蔭流道場の伊東先生の考えを聞き取れた。縦見出しに「浅沼委員長刺殺さる」とあった。「やはり

まったよ。社会党の委員長の浅沼さんが十七歳の少年に刺殺されてしまったよ」

「しきつ、何ですか、それって。まさか」

東彦は驚きながら問い返した。

「そのまさかだよ。刺されて死んでしまったんだよ」

「本当ですか」

東彦は信じられなかった。

「本当も本当、夕刊に載っているよ」

と言って、先生は新聞を東彦に手渡した。

東彦は新聞を先生の手からもぎ取るようにして取り、広げた。

「一面、一面だよ」

先生は東彦の慌てぶりを制するかのようには声を掛けて来た。た。

東彦は新聞の一面を出し、机の上に広げた。思わず「あつ」という声を出しそうだった。何と、四段組の写真が大きく掲載されていた。舞台の上らしきところで少年が半身に身構え、両手で握った短刀らしきものを腰の前で水平に持ち、今まさに突きかからんという光景であった。細めた目は相手の心臓に狙いをつけている。

浅沼委員長はその攻撃に対し、両手を広げて防ごうとした。浅沼委員長は亡くなった」のかと力が抜けていくような思いであった。しかも犯人は東彦と同年生まれのたった十七歳である。これまた信じ難いことであった。場所は、日本の首都東京、そして、二千人を超す観客を収容できるホールを持つ名うての多目的会館にてである。しかも日本の主要政党三党首の立会演説会の途中での出来事である。衆人環視もいとこころである。傍若無人というか大胆不敵というか、とても十七歳の少年が為せる所行とは思われないのだ。

東彦が浅沼委員長に直接会ったことはない。しかし、彼の父親が国鉄動力車組合員であったため、その機関紙や社会党の宣伝ビラなどが時折家に持ち込まれていた。委員長の親しみのあるメガネの風貌や浴衣掛けの大きな姿などを写真でよく見かけていた。こんな訳で東彦は政治家の中では地元出身のササコウ（元社会党委員長佐々木更三）と並んで浅沼委員長にも親近感を持っていた。それだけに衝撃は大きかった。

「東彦、大丈夫か」

早川先生が声を掛けてきた。

「はい、大丈夫です。しかし、ショックですよ、先生。犯人は私らと同じ年齢じゃないですか。こんなこと本当にあ

るんですかね」

「これは日本の悲劇だね。また、日本の恥でもある。今年の六月には社会党顧問の河上丈太郎さん、七月には現職首相だった岸信介さんがやはり刺されている。日本にはまだ民主主義が根付いていない証拠だね。白昼堂々と暗殺が行われるなんて。幕末じゃないんだからね。本当に残念だ」

早川先生も気落ちしているようであった。

「先生、夕刊お借りしてよいですか。実行委員のメンバーにも見せてやりたんです。明日朝、職員室に返しておきますから」

「ああいいよ。東彦たちも連日大変だね。後四日間あるから体大事にしてよ。今日はできるだけ早く寝るんだね」

そう言うと先生は立ち上がった。そして、タバコをくわえるとマツチで火を点け、大きく吸った。次にそれをゆっくりと長く吐いた。紫煙が丸く四方へと広がっていった。

「それじゃ、失礼します。お休みなさい」

東彦は先生に声を掛けると畳んだ新聞を両手で抱えるようにして職員室を後にした。廊下へ出ると冷気が体を包んだ。同時に疲労が体の芯から沁みだし、全身に広がっていくのを感じた。がらんとした廊下は人の心の空虚さを示しているように東彦には思えた。

「このところ二十度を超す日が続き日中は暖かだった。しかし、もう十月の半ばだ。夜が冷えるのも無理はない。仙高祭当日は晴れてくれるといいがなあ」

東彦はそんなことを思っていると、急に言いしれぬ悲しみが全身を襲った。東彦は、こんな沈んだ気持ちで生徒会室に戻ったら皆に嫌な思いをさせるに違いないと思った。東彦はそのまま校庭へ出た。外は廊下以上に冷えていた。夜気が校庭を包み込み、昼間に比べて狭くなっているように感じた。校庭を取り囲む樹木、そして西隣の満勝寺の森がまるで周りを威圧するように黒々と迫って来ている。空を見上げると黒く厚い雲が一面に覆っていた。「雨が来なければいいのだが」と思いながら東彦は見続けた。雲の流れは速かった。見上げていた真上の空がぼつかりと穴が開いたように雲が切れた。星が光っていた。東彦にはそれが愛しい命の光のように思えた。少年のあの一分の隙もない完璧な刺殺の構えが目に浮かんで来た。見上げた東彦の目から涙が溢れて来た。

「このところ二十度を超す日が続き日中は暖かだった。しかし、もう十月の半ばだ。夜が冷えるのも無理はない。仙高祭当日は晴れてくれるといいがなあ」

東彦はそんなことを思っていると、急に言いしれぬ悲しみが全身を襲った。東彦は、こんな沈んだ気持ちで生徒会室に戻ったら皆に嫌な思いをさせるに違いないと思った。東彦はそのまま校庭へ出た。外は廊下以上に冷えていた。夜気が校庭を包み込み、昼間に比べて狭くなっているように感じた。校庭を取り囲む樹木、そして西隣の満勝寺の森がまるで周りを威圧するように黒々と迫って来ている。空を見上げると黒く厚い雲が一面に覆っていた。「雨が来なければいいのだが」と思いながら東彦は見続けた。雲の流れは速かった。見上げていた真上の空がぼつかりと穴が開いたように雲が切れた。星が光っていた。東彦にはそれが愛しい命の光のように思えた。少年のあの一分の隙もない完璧な刺殺の構えが目に浮かんで来た。見上げた東彦の目から涙が溢れて来た。

「本当にあれでよかったのか。日本の未来は開かれるのか。不安と恐怖の時代の幕を切り開いたのではないか。浅沼委員長を殺したことは、自分をも殺すことになるのではないか。殺すのではなく生きて自分の考えを主張すべきではないか。」

「このところ二十度を超す日が続き日中は暖かだった。しかし、もう十月の半ばだ。夜が冷えるのも無理はない。仙高祭当日は晴れてくれるといいがなあ」

東彦はそんなことを思っていると、急に言いしれぬ悲しみが全身を襲った。東彦は、こんな沈んだ気持ちで生徒会室に戻ったら皆に嫌な思いをさせるに違いないと思った。東彦はそのまま校庭へ出た。外は廊下以上に冷えていた。夜気が校庭を包み込み、昼間に比べて狭くなっているように感じた。校庭を取り囲む樹木、そして西隣の満勝寺の森がまるで周りを威圧するように黒々と迫って来ている。空を見上げると黒く厚い雲が一面に覆っていた。「雨が来なければいいのだが」と思いながら東彦は見続けた。雲の流れは速かった。見上げていた真上の空がぼつかりと穴が開いたように雲が切れた。星が光っていた。東彦にはそれが愛しい命の光のように思えた。少年のあの一分の隙もない完璧な刺殺の構えが目に浮かんで来た。見上げた東彦の目から涙が溢れて来た。

「この日、十一月一日に供述調書が作成されることになっていた。彼は、この取り調べの最後の質問で「本件に対する現在の心境はどうか」と問われた。

「浅沼委員長を倒すことは日本のため、国民のためになる

「この日午後、Y少年は警視庁から練馬の少年鑑別所に移送された。午後二時二十分に鑑別所に到着、すぐに入所室で裸にされパンツだけを残し、すべて鑑別所で決められた衣服に着替えさせられた。その後、簡単な健康診断、およ

び入所の心得の説明を受けて東寮と呼ばれる単独室だけの棟に入った。Y少年は二階の第一号室に入れられた。

彼の父はこの部屋のことについて「殺風景なことは当然だが、独房にしては随分広いものだ、と感じた。ベッドと便器（水洗便所のように思う）だけがあつたように思う。壁はコンクリートがなまで出ていた」と描写している。

三時四十五分、少年は夕食をとる。到着後一時間二十五分経っていた。「警視庁で差し入れられたすしを特に許されて鑑別署に持ってきていたが、それをきれいに平らげ、さらに鑑別署の夕食である麦飯とカレー汁をほとんど食べた。鑑別署の夕食が四時と早いのは、職員が六時に帰るために逆算して出てきた時間だから」という。夕食にどれほど時間をかけたか定かではない。しかし、相伴するものではない、いわゆる孤食であつたから三十分間とかからなかつたと推測される。従つて、夕食後の多少の雑事があつたとしても、四時半頃には就寝の準備以外さしたることもなく過ごしたと思われる。あるいは警視庁でもそうだったように座禅を組んで過ごしたのかも知れない。

七時五十五分、教官が巡視した時は、Y少年は既にベッドの中で休んでいた。当然ながら就寝したのは七時五十五分以前である。十分前か三十分前か定かではない。重要な

のは少年が早くに就寝していたということである。少年鑑別所の就寝時刻は普通九時である。

この日、少年は警視庁での取り調べ、その後の鑑別所への移送、健康診断、入所の心得の説明など慌ただしい時間を送っている。その疲れがあつて早々に就寝したのだろうか。あるいは、自殺を滞りなく行うための計画的な早めの就寝だったのか。この日の状況、そして少年の繊細で緻密な性格を考えると計画的であつたと思える。巡視の教官を安心させるということがその主たる目的だったのでないかと推測する。教官たちを安心させることによつて少しでも計画の実行を容易にしたい、と思つたのかも知れない。あるいは布団の中でじつと聞き耳を立て、通路の気配などを探りつつ実行のシミュレーションを行つていたのかもしれない。またはそれら二つを合わせてのことかもしれない。さらに、もし少年が七時にベッドに横になつたとするならば夕食終了後の四時半から起算して二時間半の「自由な時間」があつたことになる。この時間に少年は部屋の細部を観察し、自殺実行の綿密な手立てを熟考したのではないだろうか。いわば「ブランの時」とも言える。鑑別所到着後からベッドに横たわるまで四時間四十分の時間が経過していた。

八時三十一分に東寮二階第一号室前は騒然となる。首吊り状態のY少年が巡視の教官によつて発見されたからである。七時五十五分の巡視から数えて三十六分後のことである。この時間が重要である。なぜならこの時間、概略三十分間ほどが彼の死出の旅立ちへの具体的準備時間だったと考えられるからである。「実行の時」である。

Y少年はシートを細長く裂き、それをよつて紐にした。部屋の天井には埋め込まれた裸電球が取り付けられている。その電球の周りは細い鋳物製の金網で覆われている。電球を取つてそれで何か危ないことをしないための予防策なのだろう。その金網に紐を通したのである。慎重な彼である、その紐を引っ張り、首吊りに足る強度があるかどうかを確かめよう。その上で実行したのである。実に手際がよい用意周到といつても過言でない。事実、息子が自殺したこの部屋を見た父親も同じように述懐している。

「三十分の間にベッドを電灯の下まで音をさせずに運び、シートをさき、金具を通して引っ張つてみて強さを調べ、それから歯磨きで文字を書き、ベッドに上つて・・・あるいは順序が違うかも知れないが、随分手順よくやつたものである」と。

Y少年がこの鑑別所に移送されたのは十一月二日、午後

二時二十分である。彼はこの鑑別所は初めてであり、ましてや単独室の様子などは知りようもなかつたはずである。従つて、何を使つて、どのように自殺するかは、三時半頃に入室して、室内を観察した上で決めたかと推測される。彼が生きていたと最後に確認されたのは七時五十五分である。首を吊つた状態で発見されたのは八時三十一分、この間およそ三十分（実際はもっと短いと考えられる）という極めて短い時間である。この三十分の間に死出への準備を行い、そして決行したのである。

人間が大事をなすと言ふときには様々な思案を重ねてしかる後に行くというのが一般的である。ましてや自らの命を自らで絶つと言ふときには相当の考えを巡らし、時には逡巡もするに違いない。その上、彼の場合は限られた短い時間しかなかった。しかもその間に、突然教官が来るかもしれないのだ。極めて切迫した状況で準備を行ったであろうことは想像に難くない。そして、少年は計画したすべてを完遂したのである。少年は強靱な精神力をもつていたと考えられる。

これらのことを考慮すると、Y少年はこの鑑別所へ入つた時に初めて死を決断したとは到底考えられない。浅沼委員長を刺殺後、あるいはそれ以前から己が「一人一殺」を

決行した後は自決するということ思い定めていたのではないかと考えられる。現に警視庁で係官との会話の中で「死のうと思えばいつでも死ぬますから」と、自殺をほめかすようなことを言っている。後は機会だけを窺っていただけなのである。

彼が大日本愛国党に所属していた頃、党員の幾人かと「一人一殺」について論議したことがあった。彼がこの一人一殺を肯定した意見を述べると、彼が尊敬し、また、赤尾総裁の義弟にあたる山田十衛が「たとえどのように政治的な意見が異なっても、殺すことで決着をつけようとするのは間違っている。それでは何の解決にもならない」と述べ、さらに「自分の行為は自分自身で責任を取る。他の命を奪ったら、自らの命も奪わなくてはならない」と少年を論じた。

もし、Y少年がこの山田の言葉を胸に刻んでいたらと思う。いや、恐らく彼は真摯にこの言葉を受け止め、行動の指針としたのだろうと考えられる。そして、聡明で、彼我にも厳しく、何事にも事理を重んじる彼は、見事にそれを成し遂げたのである。そうであれば、この迅速な判断、手際の良さも納得がいく。納得がいつてもやはりこの段取りの良さ、少年の強靱な意志、変わらぬ冷静さには瞠目される。

の冷静さとは対極をなすのであるが、彼が書いた字には躍動感が見られる。これは彼の心の高揚を反映しているのではなからうか。それは彼の死を彼自身が悲しさとか贖罪、あるいは自裁などと捉えているのではなく、何か次の新たなステージに向かつて勇躍でもしようという気持ちを表したとも捉えられる。

また、一方で冷静さ、他方で感情の高ぶりを同時に保持している。しかし、感情、行動の破綻は窺えない。相反する感情を見事にコントロールしているようにも見える。十七歳の少年がこのような感情コントロールが出来るとは通常考えられない、と思う。

他方、親ならこれらの「遺書」を見たときに寂しさ、あるいは悲しさ、物足りなさを感じるのではなからうか。十七歳まで慈しみ、育てたわが子ならば死に際し、せめて何かしら親への言葉を残して欲しいと願うのは人情と言うべきであろう。それがなかったのである。なぜ少年は両親への遺書を残さなかったのだろうか。

Y少年は古典に親しんでいた。また、尊敬する人物の中に吉田松陰がいた。少年は吉田松陰の著書や松陰に関する書物などにも目を通していただろう。その松陰が安政の大獄で処刑される一週間前に詠み、郷里の両親に送った歌が

る。

壁の「コンクリートは灰色で、そこに歯みがきの文字があった」。これは父親の表現である。コンクリート壁に書ける筆記用具がなかったのであろう。少年は支給された粉歯みがきを水に溶き、「人さし指を筆にして」遺書を壁に記したのである。

七生報国
天皇陛下万才

これは決意表明のようにも読める。死出の旅に際し、自らの「忠君愛国」を改めて公にしたのであろう。しかし、肉親や同志等への遺書はないという。天皇の「天」という字にY少年の潔癖さ律儀さをも垣間見ることが出来る。天の下の横棒は上の横棒より短い。これが学校で教える正字である。ところが大概は下の横棒を長く書いている。少年はきちんと正字で書いているのである。さらに全体の字も丁寧に正確に、そして、同じ濃さで書かれている。ここでも細かな気遣いをしている。今まさに死なんとする十七歳の少年が容易に為せる技ではない。

その上、心の動揺もなく冷静に書いたことが窺える。こ

ある。

親思ふところにまさる親心

けふのおとづれなにと聞くらむ

(広辞苑)

Y少年がこの歌を読んでいたかどうかは明らかではない。しかし、松陰はこの時、この歌を含めて三首詠んでいる。これら三首は右翼の人ならばだれでも知っていると思う。従って、Y少年もこの歌のことは知っていたはずである。繊細な心情を持ち合わせていた少年が死を目前にして松陰に做ってもおかしくはないと思う。しかし、現実には両親への遺書はなかった。

だが、少年には十分その気持ちがあったかもしれない。ただ時間的な余裕がなく、書けなかっただけかもしれない。逆に、少年は意図的に、あるいは決然として両親への遺書を残さなかったということも考えられる。少年は「日本赤化阻止」の大義実現として「一人一殺」を掲げた。それは少年の「忠」を果たすためでもあった。九月、少年は山田治子から借りた生長の家会長、谷口雅春の『天皇絶対論とその影響』を読んで「目から鱗が落ちる」思いをする。

「私はこの本を読んで今まで自分が愛国者であることを誇りに持ち、自分の役割が国家にとって重要なものであると自負していたことを深く恥じ、私心のない忠というものではなくては本当の忠ではないと思いました。今まで私が左翼の指導者を倒せば父母兄弟や親戚友人などに迷惑がかかると考えたことは私心であり、そういうことを捨てて決行しなければならぬと決心しました」

Y少年は、おそらく断腸の思いというより彼の論理の延長上で父母を切ったのかもしれない。そして、それがその時点での彼の矜持だったのかもしれない。

少年は時間が切迫していたがゆえにか、あるいは自らの矜持として両親への遺書を認めなかったかは第三者が決めることではなく、むしろ謎としておいた方が少年への礼意にかなうのかもしれない。

彼が壁に残した「七生報国」は「七度までも生まれ変わって、賊を滅ぼし国のために働く」（広辞苑）ということとで、やはり「忠」のことである。足利氏との戦いに敗れた楠木正成兄弟の死に際しての言葉として有名である。

この言葉に対し、父親は「国に報ゆる方向の是非、手段の是非については」「意見を異にする」と述べている。

「国に報ゆることの大切さは知っているが、後世を信じな

い私にはオンリーワンでオンリーワンスのこの生命はそう簡単に投げ出せない」と。「たった一つでたった一度の命を互いに大切にしたい」という父親の投げかけである。

読みようによっては死者であるわが子を批判しているようにも読める。しかし、「個人主義、自由主義」を標榜して止まない父親の面目躍如とも言える。また、どんなことでも理非を明らかにしないではおけない父親の律儀さ、潔癖さでもあると言えよう。Y少年はこの点も父から受け継いでいるように思える。

もうひとつ疑問が残る。それは、Y少年がなぜ警視庁の拘留所から鑑別所に移った当日に自殺をしたかということである。それほどに急がなければならぬ理由があったのだろうか。急ぐことがあったならば警視庁の時にも機会があったはずである。独房で過ごす時があったのだから。しかし、少年はそうはしなかった。何が原因だったのだろうか。

第一に考えられることは供述調書を取られたことではないだろうか。供述調書には少年の出生から浅沼委員長を刺殺するまで事細かに書かれている。また、犯行の動機、共犯者や指図者の有無、愛読書や尊敬する人物、そして思想の形成歩みなど多岐に、しかも詳細にわたっている。大げさに言えば少年の脳内の全ての記憶を開陳させられ、裸に

された状態ということである。勢い浅沼委員長刺殺の一連のことをも省察することになる。少年は単独室で座禅を組んでいた。座禅は自己省察をさらに深めたに違いない。そこで感得したことは「自分の大義は完結していない」ということではなかったのか。すなわち、「国賊浅沼稲次郎誅殺」は道半ばである。「無私とすることで忠は完結する」と。

「無私とは自決」であり、自決とは「己を空しくする」ことである。そして無私の忠が「七生報国」を果たすその忠が完結した時に、「天皇陛下万歳」と天皇を褒め称え飛翔する。「万歳」は彼の無上の光栄であり、喜びだったのだろう。そこに少年の自決の意義が示されているのではないか。

それでは何故警視庁から東京少年鑑別所に移送された当日、十一月二日に自殺をしたのだろうか。少年は一面において性急なところがある。思い立つと直ぐに行動せざるを得ない。また、警視庁で経験済みである係官らとの人間関係が濃密になるのを避けたのではなからうか。人間関係ができ、少しでも感情の交流ができると決意が薄れたり、鈍くなる。そのことを避けたのではないかと推量される。したがってこのことを避けるために移送された当日に決行したのではなからうか。

また、これはあまりにもこじつけがましいが、浅沼稲次郎の法要に合わせたとも考えられる。二日は浅沼稲次郎が殺されてから二十一日目に当たる。二十一は掛け算で3×7である。すなわち三七日みなぬかのことである。仏式の法要日にあたる。

Y少年が仏教に関心を持っていたという証左は掴めていない。これは偶然に過ぎないだろうが、それでも何かしらの因縁を感じるのである。

Y少年の首吊り死体が発見されたのは鑑別所到着してから数えて六時間十一分後ことであった。あまりにも短か過ぎる時間であった。あたかもY少年の生き急ぎの人生を象徴しているようである。係官により床に下ろされた少年の「体にはまだ温もりがあった」という。

参考文献

白井吉見 編著 「安保・1960」筑摩書房

参考、引用文献

山口二矢顕彰会編 「山口二矢供述調書 社会党委員長

浅沼稲次郎刺殺事件」展転社

沢木耕太郎著 「テロルの決算」 株式会社文芸春秋社